

「金貸は貧乏人泣かせて、罪な商賣だといふじやないか」

「罪な商賣かも知れねへが、俺等が其れをやるわけじやない、俺等はただ奉公人なんだから」

「其りやさうさ、まあ何でもよく勤めさへすりやいゝんだらう」

「家の留守番をして、庭でも掃いてありや宜いんだとさ、俺等は片足が不自由だけれども力があるから泥棒の用心に宜いからつて其れで雇はれることゝなつたんだ」

「左様だらうねへ、金貸の家なんぞは泥棒に覘はれるだらうねへ、家の用心もしなくちやゝ可げないけれど自分の身も用心しなくちや可げないよ」

「大丈夫だ」

「それで家の人数は多いのかい、雇人はお前の外に澤山ゐるだらう

ねへ」

「うんにや、俺等の外には儼焚が一人、その外に他から來てゐる人は居ねえ」

「大へんに小締りした金貸さんだねへ、それでは家の者が多いのでせう、息子さんだとお娘さんとか」

「其れも随分少いのだよ、よく考へて見ると、おかしな家だよ」

「おかしな家とは」

「でも、主人といふのは子供だからね、子供といつても十四か五位だ、それが主人で其の子のお母さんとも附かず姉さんとも附かない女が一人、其の子は、おばさん〜と云つてゐるが、其の二人きりなんだ」

「その女の女と子供と二人で金貸をしてゐるの」

『うむ、さうだよ、代々やつてゐるのかと思へば、さうでもなく、ほんの近頃始めたらしいんだから』

『では、其のおばさんといふのが先の御亭主か何かで残して置いたお金をもつて、それを寝かして置くのも惜しいから、金貨をして暮らさうとでも云ふんだらう』

『そんな事だらうと思ふよ、其の子供がまた、馬鹿にマセた子供でね、主人氣取りで、俺等を使ひ廻す氣になつてゐて、うつかり坊ちやんなんと云はうものなら怖い眼をして睨むんだから可笑いや』

『其の子供さんが番頭をするだらうから、お前は番頭さんと云へば宜いじゃないか』

『番頭さんでも氣に入らないんだ、旦那様と云はないと納まらないんだから可笑いやな』

『旦那様といふのは少し可笑いね、十四や十五の子供をつかまへて』

『けれども旦那様と云ふことになつたんだ、さうして見ると、俺等はあの、おばさんと云ふ人の方を何と云つて宜いか、それを今考へてゐるんだ』

『其の子供が旦那様では、眞逆奥様とも云へないしね』

『さうかと云つて、まだお婆さんといふ年でも無いんだ、やつぱり奥様と云つてゐるより仕方があるめえ』

『何でも宜いから其の時の都合のいいやうにお言ひ、それからお前、短氣を出さないでよく奉公をしなくては可けないよ』

『旨く勤まるか如何だか、それにしても君ちやん、お前の方は如何なるのだい、お前はあの輕業と一緒に旅に出る氣なのかい』

『あゝ、少しの間だから行つて見やうと思ふの、いつまで斯うして』

わたつて仕方がないからわたしも、あの人達のお伴をして旅に出て
見ることにしようと思ふの』

『もう返事をしてしまつたのかい』

『え』

『旅に出るのは危ないせ』

『でも永いことじゃないから』

『何方の方へ行くんだい』

『甲州とやらへ』

『甲州へ』

『直ぐ、歸つて來ますよ』

お君は疊かけてゐた着物をまた疊はじめます。

『君ちゃん』

米友は燈下に着物を疊むお君の姿を横の方から暫くながめてゐて、
思ひ出したやうに名を呼びました。

『何だえ』

お君は着物を疊みながら返事。

『お前は旅へ行く、俺等は奉公に行く、さうすると、また暫く會へ
ないね』

『何だい、友さん、そんなに心細いやうな事を言つてさ』

『でも暫く會へないじゃないか』

『暫く會へないには違ひないけれどお前の言ふのは何だか一生會へ
ないやうな心細い云ひ方をするから』

『一生會へないかも知れないからさ』

『縁喜でもないことを言つてお呉でない、一生會へないなんて』

「それでも何だか其んな氣持がする、これつきり一生會へないやうな氣持がする」

「また其んな事を」

「お前、その疊んでゐる着物は、そりやあの親方さんから貰つたんだね」

「さうだよ、丁度わたしの身體に合つてゐるから、持つてお出でと云つて、あの親方さんが呉たの、まだ一度位しきや手を通した事か無いんだよ」

「綺麗な着物だね」

「それからお前、櫛だの簪だの、足袋から下駄まで、そつくり拵へて呉たのだよ、中々金目のもので、わたし達が二年と三年稼いだからつて此れだけのものは出来やしない」

「お前、そんなに澤山貰つて嬉しいかい、難有いと思つてるのかい」

「そりや誰だつて、こんなに結構なものを貰へば嬉しいと思ひますわ、嬉しいと思へばお禮の言葉も出るじやありませんか」

「左様だらうなあ」

「ほんとうに、あの親方さんは親切な人ですよ、自分の妹のやうに、わたしの面倒を見て呉ますから」

「けれどもね、君ちゃん」

「え」

「あれは本當の親切ですと、お前は思つてゐるのかね」

「本當の親切……本當も嘘もありやしない、此のセチ辛い世の中に、こんなにして下さる人が二人と有りませうか」

「君ちゃん、お前は正直だから、何でも人のする事を、する通りに

受けてしまふんだが、伊勢の拜田村にゐた時は、それで宜いけれど江戸といふ處は其れでは通らないことがあるんだから』

『ホ、、、お前は可笑しな事をいふ、何處の國へ行つたつて人情に變りといふものがある筈はないじやないか』

『處が中々、そんなわけにはかりは行かないのだよ、俺等の身にしたつて、あんな約束では無かつたのだけれど、江戸へ來て見ると、直に眞黒く塗られたのは、この通り洗へば落ちるけれども、君ちやん、お前が若し眞黒く塗られると、洗つたつて如何したつて落ちやしないよ』

米友は今更のやうに自分の腕を撫でて見て、それから撒切になつた頭の毛をコキ上げる。

『ホ、、、友さん、お前今日は如何かしてゐるね』

お君は無邪氣に笑ひます。

『まさか、わたしを眞黒にして印度人に仕立てるやうな事も無いでせう、そんな事をしたつて、わたしでは見物が納まりませんからね』

『眞黒にするといふのは、其の事じや無えんだ、お前の身體を眞黒にしやうと云ふんじや無えのだ』

『何處が黒くなるの』

『は、まだお前は其れが氣が着かねへんだ、心が黒くなると可いねえんだ』

『心が黒くなる、馬鹿な事をお言ひでない、心なんていふものには色は有りやしない』

『そりや無いさ、今の處、お前の心には色が無いんだから、それで大事にしなくちや可いねえ』

「友さん、お前は學者だから、心が如何だなんて云ふんだらうけれど、わたしは學問が無いから其んな事は知らないよ、黒くなつたら洗へば宜いじやないか」

「洗つても落ちねえ」

「何だか、お前の言ふことは譯らない」

「譯らねへから、それで俺等は心配なんだ、黒くなると二度と洗ひ落すことは出来なないんだから」

「まだ、あんな事を言つてゐる」

それで暫らく二人の無邪氣な會話は途切れたが、着物を疊んでゐるお君の手は休まない、米友は両手で頤を押へて下を向いてゐるが、
「君ちゃん、如何だい、旋へ出ることを止しにしてしまつたら」
「え、わたしに旋へ出るのを止めにしろつて」

お君は疊みかけた手を休めて米友の方を向いて眼を圓くする。

「左様して呉ると、いつまでも一緒に居られるんだ」

「そんな事を言つたつてお前、もう二三日で此處に泊つてゐる宿賃も無くなつてしまふのに、お前は奉公に行くんだらう、とても二人一緒に過ごして行ける事は出来ないじやないか、それにお前、今になつて急に行けないなんて、あれほど恩になつた親方さんの前へ其んな事が言へるものかね」

「其れは左様だらう、其れじやあ如何も仕方が無へから行つてお出で」

「情ない言ひ方をするねへ、もつと威勢よく力を附けて言つて呉れなくちや」

お君は何處までも、米友の言ふことを氣にしないで、いつもの通り

軽くあしらつて、着物を疊んでゐるが、米友は、やつぱり浮かぬ
面をしてゐると、破障子の裏で、猿！

「あゝ、忘れてゐた、ムクにまだ夕飯をやらなかつた」
米友は、あはて氣味に頭を上げると

「あゝ、さうく、可哀想にムクにまだ夕飯をやらなかつたのね」
お君も面を上げる、米友は立つて障子を開けると、縁側に首を乗せ
てムクが尾を振つて鼻を鳴らしてゐます。

「ムクや」

米友は直ぐに臺所から食物を持つて來てムクに食べさせました。

「ムクや」

尾を軽く振つて夕飯を食べてゐるムク、それを見ながら米友が、

「ムク、俺等は明日から奉公に行くんだぞ、君ちゃんは近いうち旅

へ出るんだぞ、俺等はお前をつれて行く事は出来ねえが……さう
だ、お前は君ちゃんに附いて行け、俺等の代りに君ちゃんに附いて
行け」

斯う云つて米友の面が急に明るくなつて、

「君ちゃんく」

「何」

「旅へ出るにもムクは伴れて行くんだらうな、ムクを伴れて行つて
も親方は叱言を言やしないんだらうね」
お君は頷いて

「あゝ、それは宜いんだよ、ムクには此れから藝を仕込むなんて、
親方も大へん可愛がつてるから」

「それで安心した、行つてお出でく」

米友はホツと息をつきました。

三

米友が庭を掃いてゐると、木戸口をガラリと開けて入つて来たのは十四五の少年であります。子供の癖に氣取つた容姿をして、小風呂敷を抱えた容子が、いかにもこましやくれてゐるが、よく見ると其れは甲州の山の中で金を探してゐた忠作でした。

「友造誰も来なかつたか」

「へえ、誰も参りませんよ」

「あゝ、さうか」

腮をしやくつて忠作は家の中へ入つてしまふと米友は其の後を見送つて、

「馬鹿にしてやがら」

相變らず跛足を引きながら庭を掃いてゐると、

「友造、友造」

奥の方で呼ぶ聲がします。

「馬鹿にしてやがら、友造々と啗んで吐き出すやうに言やがる」

「友造、友造」

「自暴になつて呼んでやがる、返事をしてやらねえ」

「友造、友造」

「はゝゝのはだ、友造が如何したんだ、友造で悪けりや勝手にしろ」

「友造、友造」

「やあ、此方へ遣つて来るな、怒つてやがる、小餓鬼の癖に金貸な

んぞをしやがつて、生意氣な野郎だから返事をしてやらねへ」

「友造、友造」

キン／＼した聲で怒鳴りながら奥から飛んで来る容子。

「隠れろ／＼」

友造の米友は椽の下へソツと隠れました。

「おや、此處にも居ない、友造、何處へ行つたんだ、友造」

「は／＼のはだ」

米友が椽の下で舌を出すど、忠作はその上で床板を踏み鳴らします。

「友造、友造」

「はい」

椽の下から返事。

「椽の下に居やがる、何をしてゐるんだ、先から彼れはご呼んだの

が聞えないのか」

「聞えませんでした」

「嘘を吐くな」

「嘘じやありませんよ」

「嘘でなけりや貴様は嘘だ、跣足の上に嘘と来ては形なしだ」

「何だと」

「何！主人に向つて貴様は口答へをするか、主人に向つて」

いつもの米友ならば中々黙つてはゐないのだが、今日は奉公人の友造、短氣をしては可けないといふことが、お君からの呉々もの餞別の言葉でもあり、折角、仲人に立つて呉れた道庵先生への義理でもあると感心に辛抱しました。

「如何も仕方がねへ、成程お前さんは主人だ」

米友——こゝへ来てからは友造といふ名に改められたが、面を膨ら
かして、御主人様のいふ事を黙つて聞いてゐると、

「馬鹿、口なしを集めに行つて来い」

「へい」

「さつさと掃いてしまつて此方へ廻れ、よく呑込めるやうにしてや
るから」

忠作は障子を荒々しく締め切つて奥へ行つてしまひました。

「ちえッ」

友造は舌打ちをして、

「厭になつちまうな、また日なし集めにやられるんだ、日なし集め
は俺等は嫌ひだ、ナゼだと云へば、あの申譯を聞くのが厭なんだ
さうかと云つて想ふやうに集まらねへと、あの小僧ツ子の御主人様

が、ガミガミ云やがる、嫌だなあ、嫌だなあ」

友造は口小言を云つて庭を廻りました。

米友の友造が、貸金を集めに行つたあとでも、忠作はなほ一生懸命
に算盤と首つ引きをしてゐる處へ入り込んで来たのが丸鬚の町家風
の年増でありました。いつの間に變つたか、これは妻戀坂のお絹で
あります。

「七軒町の小間物屋さんが申譯に来たから、そんなら其れで宜いと
云つて歸してしまひましたよ」

「歸してしまつたつて」忠作は澁面を造つて後を見返り、

「歸してしまつては困るじやありませんか、あの口は十五兩一分で
貸してあるんですよ、今時、あゝいふ走りの金を十五兩一分で融通

するなんといふのは格別の計らひなんですよ、それを有難いとも思はずに待つて呉れ、待つて呉れで、今日で三日目だらう、いゝわいいわで歸して貰つちや困りますね』

「でも、あの人は氣前のいゝ人だから有りさへすりやあ還すんだったらけれども、無いから還せないのだらう、性の知れた人だから少し位待つて上げたつていゝだらう』

「これは驚いた、そんな了見で金貸が出来るものか、今度來たら私の處へ取次いで下さい、私が掛合ふから、いや其んな間緩い事を云つては居られん、今晚にも私が出向いて行つて取つて來ますから』

「可いじゃないかね、二日や三日は』

「可けません、そんな了見では金貸は出來ません』

「金貸といふ商賣も思つたより忙しい商賣だねえ』

「忙しくつて結構、忙しくないやうでは上つたりですよ、お蔭様で、これ御覽なさい、帳面尻が鼠算のやうに殖えて行く、ごうです、おばさん、元金が利息を生み、利息がまた子を産むんですからね、その子がまた孫を産むんですから、抛つて置いてもメキ／＼と殖えて行くんですよ、おばさんも少し算盤の勘定を覚えて下さい、利息の見つもりなんぞを呑み込んで置いて呉れないと困る、私一人で朝から晩までやつてゐるのも面白いけれど、おばさんにも少し覚えて置いて貰はないと困ることがあるでせう』

「使ふ方なら幾らでも引受けるが儲ける方は面倒臭い』

「さうでは有りませんよ、その道へ入つて見ると此んな面白いことはない、何しろ廿五兩一分といふのが利息の通り相場で、廿五兩貸て月に一分の利息を上げる其れより上を取つてはならない事に、お

上で定めてあるんだが、どうして〜裏は其んなものではない、十五兩一分から十兩一分、五兩一分なんといふのも珍らしくはないのですからね、それで向ふが折入つて御無心に来る、此方が高く止まつて其れで忌やならおよしなさいといふ腹であると、脊に腹は換られないから向うが往生してしまふんでさあ、向ふに働かして此方は懐手をしてゐて旨い汁は皆んな吸ひ上げてしまふ、こんな面白い商賣は又もあるもんじやない、これから追々大盡金といふのを初めて見やうと思つてゐますよ、大盡金といふのは大身や金持の若旦那なんぞが親や家來に内密で遊ぶ金を貸すんですね、これは思ひ切つて高い利息を取つて、さうして取りはづれの無い仕事、ナニ證文面は御規則通り廿五兩一分にして置くから、罷り間違つて表沙汰になつた處で其れだけの金は取れるんだ、そんな心配はありませんよ、

此方が表沙汰にしやうと思つても向ふで折入つて来るから……」
忠作は帳面と算盤を見比べながら獨り悦に入るのを、お絹は面白くもない面をして

「わたしの知つてる人が證人に立つから百兩融通して貰ひたいと云つて來たが如何だらう、借主は兩國で景氣のいゝ見世物師だといふ話だが、證人が確かだから……」

「見世物師」

「え、兩國に出てゐたのが今度、旅を打つて廻らうといふのに、仕込や何かで金がかゝるから少しばかり借りて置きたいと云ふんですよ」

「成程、見世物師なんといふものは、あれで當ると中々儲かるものだから都合して上げてもいいゝが……」

「今晚、また相談に来ると云つてゐたよ、よく其の時に聞いて見たら宜いでせう」

「向ふの話ばかり聞いてゐても駄目、實地に行つて容子を見て、それから抵當になりさうなものゝ目利をした上で……」

「そんなら行つて御覽」

「外にも廻る處があるから、夕飯が済んだら出かけませう、兩國は何と云ひましたかね」

「何と云つたか、わたしも能く知らない、名札が置いてあつた筈だから見て上げやう」

お絹は氣のないやうに、これだけの事を言ひばなしにして自分の居間へ歸つてしまひました。居間へ歸つてからお絹は、机に凭れてホツと息をついて、

「ほんとに厭になつてしまふ、あんな子供の癖に朝から晩までお金の事、元金が幾らで利息が幾ら、それより外に言ふことは有りやしない、彼地から来る時は賢いさうな子だから、見處がありさうに思つて、伴れて来て何かと世話をしてやらうと、来て見れば殿様は甲州勤番、わたしも此れから如何して世渡りをしやうかと途まごひをしてゐた處へ、どうしてあの子が聞き出して来たか、金貨をすることで儲かると言ひ出して、その利息勘定などを、わたしの目の前へ持つて来て見せるものだから、わたしも眼から鼻へ抜けるやうなあの子の賢いのに感心して、それではまあ、やつて御覽と云つて、それからあの子の持つてゐた金の塊と、わたしの使ひ残りのお金を資本にして、初めさせて見ると、調子はいゝにはいゝが、あゝ細かくなつて元金と利息の外には眼がないやうになつてしまつたのでは、

末の事が思はれる、この頃ではコマシヤクれた厭な餓鬼だ、見るのも厭になつてしまつた、何とかして、わたしはわたしだけのお金を持つて勝手に暮して行きたい、さうしなくちや馬鹿々々しくして仕方がない』

お絹は續いてこんな事を考へてゐました。

『今晚は何處へか出かけてやらう、それにしても困つたのはお金、一々あの子が勘定をして封印をして、他の人には手もつけさせないやうにしてあるんだが、一つ探して見てやらうか、あとで文句を云ふだらう、成程斯うして置けば、お金はズンと利に利を産んで殖えて行くだらうけれど、遣へないお金では全くつまらない、よし、歸つて來たら、相談をして、わたしの取るだけのものは取つて別れてしまはう、わたしは其の金で、一軒を立て、お花のお師匠……』

もう其んな事をして居られない、いゝ加減の相手があれば、と云つて好いたらしいのは頼みにならないし、頼みになりさうなのは碌でもなし、如何していゝかわからない』

お絹は忠作を旨く使つて、番頭も小僧も兼ねた仕事をさせ、自分は蔭で好きな事をして面白おかしく暮さうといふ目算であつたのが、その事業は、ごうやら思ふやうに行くが、お絹の目算は外れ、肝腎の金銭の出納、收支の自由は忠作が一手に握つてしまつて、一分一朱も帳面が固く、お絹が却て虚器を擁するやうになつてしまつたから厭氣がさして堪まらないのです。

四

資金を集めに一廻りして來た米友。

神田の柳原河岸を通りかかったのは、今で云へば夜の八時頃でした。懐中には十兩餘の金があつて、跛足を引きくやつて來ると闇の中

から
「ちよいと、旦那」

呼ばれて足をどよめた米友の友造が、

「誰だ」

「容子のよい旦那」

闇い處から呼んでゐるのは女の聲、丁度その時分、他に往來が途断えてゐたから、友造を見かけて呼んだものに違ひないと思はれます。

「俺等に何か用があるのかい」

「此方へゐらつしやいよ」

「お前は其處で何をしてるんだ」

「其んな事を云はずに此方へゐらつしやいよ、ほんとうに容子の
いお方」

「馬鹿にしてやがら」

「小作りで華奢なお方」

「馬鹿にしてやがら、小作りだらうと大作りだらうとお前の世話に
やならねへ」

「ねえ旦那」

「用があるなら早く云ひねえな」

「何を云つてるんですよ、用があるから呼んだんじやないか」

「そんなら早く云つてしまひねえ、俺等はこれでも主人のお使先だ」

「まあ悠くりしておゐでなさいよ」

「大事の金を懐中に持つてるんだ、主人の金だから大事だ」

「お金、頼もしいわ、そんなに大事なお金なら暫らく預かつて上げやうじやありませんか」

「お前は俺等を調戲ふつもりなんだな、女の癖に、この暗い處で、男をつかまへて調戲ふとは呆れたもんだ俺等だからいゝけれども外の男だと飛んだ目に遭うぞ」

「あはゝだ、お前さん此の柳原の土手を初めて通るんだね」

「初めてなもんかい、これで三度目だい」

「三度目、それでも夜になつて通るのは初めてだらう」

「其りや左様よ」

「左様だらうと思つた、この柳原は晝間通ると、夜通るとは規則が違ふんですからね、夜になつてから此の通りを通るに税金がかかる事を知らないんだらう」

「税金がかかる」

「税金をわたしに納めてからでなければ通れない規則なんですからね」

「馬鹿野郎」

女がからみついて来るから友造は面倒がつて逃げ出しました。逃が出すといつても足の不自由な友造だから早速には逃げられないで家鴨のやうな恰好をして駆出しました。女は其れきり追もしないで、

「ホ、ホ、小柄で華奢で、さうして歩よのお上手な旦那、またゐらつしやいよ」

友造の逃げつぶりを立つて見て笑つてゐました。息せきゝつて逃げて来た友造。

「馬鹿にしやがら、女でなければ、打ちのめして呉れるんだが」

漸やうやくにして長者町てうじやまちの奉公先ほうこうさきへ歸かへつた友造ともぞうは御主人ごしゆじんの忠作ちゆうさくの居間いまへ行いつて見みましたが、何處どこへか出て行いつたらしく、暫しばらく待まつて見みても歸かへる容よう子すがないから、自じ分ぶんの部屋へやへ歸かへつて一息いきついてゐる間に、披つかれが出てついうとくくと寢ね込んでしまひました。翌朝あさになつて忠作ちゆうさくの前まへへ呼よび出だされた友造ともぞうが

『困こまつたなア』

『馬鹿ばか』

忠作ちゆうさくの爲ために頭あたまごなしに吐しゃられました。

『だから財布さいふは首くびへ掛かけなくちやならんと言いつて置おいたぢやないか
グルク捲まきにして懷中ふせこへ突つ込んで置おくから此こんな事ことになるんだ』

『エ、と、柳原やなぎはらの土手でだ、たしかに彼あの時ときに落おしたに遠ちがえねへ』

『柳原やなぎはらの土手で如何どうしたんだ』

『あの土手での追劔おひはぎが出でやがつたから其奴そいつを追拂おっはらつて逃にげた時とき』

『馬鹿ばか、女をんなの追劔おひはぎといふ奴やつがあるか』忠作ちゆうさくは苦にがりきつて、

『ありや夜鷹よたかといふものだ』

『成程なるほど』

『何が成程なるほどだ、その夜鷹よたかに捲まき上げられたんだらう』

『如何どうも仕方しかたが無なえ、もう一いべん行いつて探さがして來くる』

『うむ、探さがして來こい、出でなけりや道庵どうあんさんに話はなして、折角せつかくだがお前まへに暇ひまを出だすから、そのつもりで確しつかり探さがして來こい』

昨晚さくはん、十兩餘じゅうりやうあまりの金かねを何時いつ何處どこへ落おしたとも知しらずに落おしてしまつたが、その晩ばんは疲つかれて寢ね込んだから今朝けさまで氣きがつかまませんでした
いざ御主人ごしゆじん忠作ちゆうさくの前まへへ並ならべやうとして見みると其その金かねが無ないので、米こめ友ともも色いろを變かへてしまつた、といふわけで、思おもひ當あたるのは昨晚さくはんの柳原やなぎはら

へ出た奇怪な女の振舞であります。あの邊に少し出入をしたものは誰でも知つてゐる筈の夜鷹です。それを米友はまだ夜鷹と知らないでゐるのに忠作はまた友造が夜鷹に引かゝつて捲き上げられたとばかり邪推して、金が出なければ米友を追出すことに了見を定めてゐるらしい。

「弱つたな」

跛足を引きく柳原の方を差して行く、柳原へ行つて見た處で、あの女が取つたものならば、出て来る筈はないし、落したものならば最早拾はれてしまつてゐる筈、斯うと知つたらあの女の面をよく見て置けば好かつたものをご米友は今更に悔みます。悔んだ處で、闇い處から出て来たものだから面の見やうもなかつたし、たゞ聲に聞き覚えがあるといへばあるのだが、それだつて別段耳に立つ程の聲で

も無かつたから、聲だけでは今眼の前へ其の女が現はれて来た處でわからう筈はありません。

「小作りで華奢で、歩よのお上手な旦那と云やがつた、馬鹿にしてやがら」

米友は昨晩の女の言草を思ひ出して腹を立てました。そんなに冷かされては米友だつて腹を立つのは無理もないやうなものだが、それよりも、人の懐中物を奪はうとするやうな性質の悪い女が江戸の市中に徘徊してゐるかと思へば、それが憤慨に堪へないのです。

「向ふでは知つてるだらう、向ふでは、俺等の歩きつきまで見てゐるんだから、俺等が柳原を通れば、若しあの女が正直な女でありさへすりや、拾つた金を返して呉れるに定まつてるが、夜鷹でもする位の奴だから、拾つた處で知らん面をしてゐるに定まつてる、さう

なると俺等はまたあの家を追出されるんだ、何方へ行つてもホントに詰らねへ」

米友は且つ憤慨し、且つ悲観してしまつて柳原の昨晚騒ぎのあつた處まで来て見たけれども、河岸に材木が轉がつてゐたり葭簀張がしてあつたりする位のもので、別段其處に人が住んでゐる容子もないし、

「ちよいと、容子のよい旦那」

と云つて呼びかけるやうな女の氣配も見えないから、ポカンとして立ち盡して居ました。

十兩と少しの金を尋ね出さなければ米友は御主人の家へ歸ることが出来ないのです。

神田と淺草の方面を當もなく歩き廻つてゐたが當のないことは何處

まで行つても當がないから、一せん飯を食べて腹をこしらへて、再び柳原通りの和泉橋の袂へ戻つて來ました。

「詰まらねえ」

この時後の方から薩のやうな巻いたものを抱へて三人連の女がやつて來ました。其の三人の女をよく見ると、その二人は手拭を被らないで、頭の上へ御幣のやうな白紙を結んでゐます。その白紙がひらひらと河岸の夕風で踊つてゐる處が何となく目につきました。

「ちよいと旦那」

呼びかけられて米友は眼をパチ／＼しました。

「もし小柄で華奢なお方」

「ナニ」

米友は、慥かに聞いた聲だと思ひました。

「何を其處で考へてゐるんですよ」

「少し探し物があるんだ」

「おや、探し物」

と云つて女は、ズカ／＼と米友の傍に寄つて來ました。

「其處に突立つてゐたつて、探し物は出て來やしませんよ、歩いて御覽なさい、小柄で華奢で歩よのお上手なお方」

「おや、お前は」

「探し物といふのはお金でせう、鬻金の財布に入れたお金の事です、それをお前さんは探してお出でなさるんでせう」

「それ、それだ」

「そんなら御心配なさいますな、ちやあんとわたしは預かつてありますから」

「あ、さうか、それは宜かつた」

米友はホツと安心の胸を撫で下ろすのを女は笑つて

「意氣地のない人だねへ、女を見て、あんなに逃げなくつてもい、じやないか」

「うむ」

「お前さんの逃げつぷりが餘まり可笑しいから後を暫く見送つてゐましたのよ、さうすると、足許に落ちてゐたのが財布、手に取つて見た時分には、もうお前さんの姿が見えなかつたから、少しばかり追かけて見たけれど、何方へお出でなすつたか分らなかつたから預かつて置きました」

「有難う、あれは俺等の金ぢやないんだ、主人の金なんだから」
「念の爲に、わたしは中をよく調べて置きました、さうして直ぐに

お係りへ届けやうと思つたけれど、さうすると面倒になるし、仲間の者に見せれば、直ぐに使はれてしまひますから、見てごらんさない、こんな細工をしましたのよ、わたしの頭の上の仕掛を」
 女は御幣のやうな白い紙の片がひらく／＼してゐる頭を米友の前へ突き出して、

「お前さん、この白い紙を取つて頂戴、お前さんに取らせやうと思つて、わたしがワザ／＼こんな事をしたんだから、わたしが、こんなことをして置いたのは、若しやお前さんがお金を失くして探しに来やしないかと思つて、その時の目印なんですよ、暗い處だからお互に面付がわかるんじゃないし、わたしの方では、お前さんの小柄なのと、歩きつきのお上手なのに覚えがあるんだけど、お前さんの方ではわたしがわかるまいと思つて、其の目印に此の紙を頭に附

けたんだから、この紙をお前さんに取つて貰へば本望といふものだよ」

「あゝ、さうか、俺等はさつきから何の爲にお前が其んな紙きれを頭へ結ひつけてゐるのかわからなかつた」

「此方へお出でなさい、今いふ通り人に知れると面倒になるから誰にも知れないやうに、わたしが善い處へそつと隠して置いて上げたのだから」

女は米友を土蔵の裏へ引張つて行つて河岸の水際まで米友をつれて来た時に

「その石を轉がしてごらんない」

「あ、これだ／＼」

石を轉がすと其の下にあつたのは正に自分の持つて居た財布。

「早く持つてお返りなさい、それが爲に御主人を失敗るやうな事があるど、お前さんもまだお若い人だから爲にならないから、さうしてこれを御縁にまた遊びにお出でなさいよ」

「お前さんの家は何處で、名前は何といふんだ、改めてお禮に上がらなくちやならねへ」

「わたしの家、其んな事は如何でも好うござんすよ、お禮なんぞは可けません——名前だけは言ひませう、お蝶と云ふんですよ、此處へ来て、今時分、お蝶くといへば、大概お目にかゝれますわ」

五

落した金をお蝶といふ夜鷹の女から受取つた米友は不思議な感じに打たれます。

賣女のうちでも一番卑しい夜鷹、二十文か三十文の金で、女の一番大切な操を切賣りする女、この女に十兩の金が欲しくはないのだからか、取つても隠しても罪にはならない十兩の金は大事に預かつて返しても返さなくても知れる筈のない人へ返してやる、さうして掛け替の無い大事な操は二十文三十文の金に替へて懺氣がないといふことが兎にも角にも不思議です。

不思議に思ひながら長者町へ歸つて来て、主人忠作の家へ来るには来たが、厭なく、氣持に打たれてしまひました。もう一足も此の家へ足を入れる氣にはなりませんでした、何等の理窟もなしに此の家が厭でく堪まらなくなりました。

「金は持つて来たぞ、そうら確にお歸し申すぞ！」

米友は大音を揚げて財布ぐるみをつくりと格子戸の中へ投込むや否

や、物に逐はれるやうに一目散に逃げ出して来ました。跛足の足で逃げ出しました。

又も忠作の家を追んでしまつた米友は何處をどうブラ／＼歩いて来たかやがて下谷の山崎町の太郎稻荷の處まで来てしまひました。そこへ来ると門前に黒山のやうに人がたかつてゐます。

「貧窮組が出来たんだ、貧窮組」

米友が社前をのぞいて見ると、大釜が据えてあつて其れでお粥を煮てゐます。世話人のやうな威勢のいゝのが五六人で、そのお粥の給仕をしてやると、群がり集まつた連中が旨さうに食つてゐます。切溜の中には澤庵や煮染や様々のお菜が入れてあります。

「有難え、貧窮組が出来た」

その大釜からお粥を貰つて食てゐる人を見ると、貧乏人ばかりでは

ないやうです。乞食非人の體の者などは一人もゐないで、小さくとも皆んな一家を持つてゐるやうな人間ばかりですから、米友も變に思つて見てゐると、しまひには給仕をしてゐた世話人らしいのが、其のお粥を食ひはじめます。さうすると今まで食さして貰つた貧窮人が今度は變り合つてお給仕をしてやつてゐるから、米友はいよいよ變に想つて、

「施しをするんだか、されるんだか譯らねえ」

と云つてる口許へ世話人が、お粥の椀を持つて来て、

「さあ食ひねえ、貧窮組」

米友は煙に捲かれて其のお椀を手に取りました。あとから／＼とやつて来る連中、見れば必らずしも食うに困るやうな貧乏人のみではないと見えるのが、

「貧窮組が出来たさうで、どうかお仲間にして戴きたうございます」
お粥を貰つては食べ、食てしまつて給仕方に廻る、誰も少しも遠慮
をするでもなければお禮を申述べるでもないから米友も調子に乗つ
て其のお粥を食てしまひました。腹の透いてゐる時だから旨い、べ
ロりと一杯を平げた時、またお代りを世話人が鼻先へ持つて来て呉
れたから、それもべロりと平げてしまひました、とう／＼四杯まで
米友が其のお粥を平げてしまつて澤庵をカチつてゐると、

「さあ、これから廣小路へ押し出すんだ」

この連中が雪崩を打つて太郎稻荷を押し出したから米友も其れと一
緒になつて跛足を引きます。

「貧窮組」といふのも可笑なもので誰がもくろんで、誰が煽動たど
もないうちに斯うして大勢が集まつて町内から町内へと繰込んで行

くのです。物持の家へ行つては、米とお菜と金を貰つて、それでお
粥をこしらへて食ひます。それを食つてしまつと、また関の聲を上
げて次の町内へ繰込みます。こちらに一組出来るとあちらに一組出
來ます。けれども可笑な事には別に其れが亂暴を働くといふのでは
ありません。たゞ斯うして町内から町内を食つて歩くだけの事らし
いのです。それに江戸名物の彌次馬が面白がつて食付いて飛び出す
出ないと幅が利かなくなつたり憎まれたりするから表通の商人ま
でが此の貧窮組へ飛び込んでお粥の施しを受け、一ぱしの貧窮人ら
しい面をします。

この連中が、昌平橋の處へ来て、町角へ大釜を据えました。誰が何
處から持つて来たか荷車が二三臺、米とお菜が澤山に積んでありま
す。さうすると川の向ふと此方から貧窮人が眞黒くなつて押出して

来ました。

併しながら昌平橋で貧窮組と別れた米友はひとり柳原河岸へやつて来ました。

「お蝶さん」

「誰あれ」

米友に呼ばれた夜鷹のお蝶は土藏の裏から出て来ました。

「あら、お前さんはお金を落した人」

「お蝶さん、俺等はお禮に来たんだ」

「お禮なんぞ……」

「お禮と云つた處で、何も土産を持つて来やしないよ、俺等は主人の家を追出ちまつたんだから」

「まあ、追ひ出されたの」

「追出されたんじやない、追ん出たんだ」

「如何して追出たの」

「自分から出ちまつたんだ、あんまり癪にさわるから出ちまつたんだ、お前さんに拾つて貰つた財布を家の中へ叩き込んで、それつきりで家を追んでちましたんだ、それだから、今の俺等は一文無しで宿なしよ、お前さんにはお禮をしなくちや済まねえのだが、さういふわけで、折角お金を拾つて貰つたが、お禮をする事が出来ねえんだ、けれどもね、黙つてゐちや悪いから、口だけで、お禮を言ひに来たんだ、また俺等が何處か奉公口が見つかつて、小遣ひでも出来たら改めてお禮に来るから、悪くなく思つて貰ひてえ」

「まあ、お前さんは中々感心な人ね、その心持だけで澤山よ、けれども旦那の家をムカツ腹で飛び出すなんて、それはお前さんが若い

「からよ、思ひ直してお詫をしてお歸りよ」

「嫌な事だ、嫌な事だ」

「一刻な人だねへ、さうしてこれから何處へ行くつもりなの」

「何處へ行くといつて當は無いな」

「ごうもお前さんは口の利きつぶりや何かぞ可笑しな人だよ、心持に毒のなかりさうな人だよ、ほんとに行く處が無ければわたしの家へお出でなさいな、親方に話して上げるから、わたしの親方の家は本所の鐘撞道新道にあるのよ」

六

福士川から徳間入をした宇津木兵馬と七兵衛は机龍之助を發見することなくして却て、がんにりの百藏を發見してしまひました。

「兄い、氣を確かり持たなくちや可けねえ」

「あッ、抜いちや可けません、先生お抜きなすつちや可けません、

抜いてしまつちや納まりがつかまません」

がんにりきは引つゞいて嘸言ばかり云つてゐます。此の山入りでは、僅かにがんにりを得たゞけで山道を元の通りに下つて一行は又富士川の岸に出ました。

富士川を登る舟は追手を孕んだ時は却て下る舟よりも速いところがあります。福士から此の舟に乗つた兵馬と七兵衛とがんにりと三人は早くも甲府に着きました。

机龍之助の居る所は彼の白根の麓。かうしてゐる中に秋も閑けてしまつて雪にでもなつては道の難儀が思ひやられる、兵馬は心急がれてゐたけれども、名にし負ふ山また山、相當の用意なくては入るこ

どの出来ない處であります。
甲府の南の郊外にある一蓮寺といふのは遊行念佛の道場で聞えた寺
であります。

折柄その鎮守にお祭禮がありました。

『江戸名物、女輕業大一座』

本堂の屋根よりも高く幕張をした小屋、泥繪具で描いた看板の強い
色彩、高い處へ登つて片足を撞木にかけて逆にブラ下がつてゐる處
社袴を着て高足駄を穿いて三寶を積み重ねた上に立つてゐる娘の頭
から水が吹き出す、力持ちの女の便々たる腹の上で大の男が立白を
据えて餅を搗く、そんなやうな繪が幾枚もく並べられてある真中
の處に

『所作事、道成寺入相鐘』

怪しげな勘亭流、それを思ひ切つて筆太に書いた下には、鱗の衣裳
を振り亂した美しい姫、大鐘と撞木と、坊主が數十人、繪の具が、
べとくとして生な色。

そのあたりは押返されないほどの人混みの中へ一人の身扮卑しから
ぬ武士が伴をつれて割り込んで來ました。

頭巾こそ被つてゐるけれども此れは紛れもなく神尾主膳の微行姿で
あります。

『はゝあ、江戸名物女輕業大一座』

神尾主膳も亦此の繪看板を打ち仰ぐと、

『評判でござりまする、女といふのが評判なのでござりまする、太
夫から下座に至るまで皆んな年頃の女、それが評判で、御覽の通り
大入を占めて居りまする』

草履取が説明を申上げると、

「成程、兎も角江戸から出て来たものに違ひはなからう、見物して参らう、跟いて来い」木戸口に立つと

「如何やら御重役のお微行らしい」

木戸番が頭取に耳うちをしました。

この輕業の一行は兩國に出てゐた一行。米友を黒ん坊に仕立てた一座、女の輕業足藝の類は多くは前の通りで、新に加はつたお君が「道成寺」を出すといふ事が人氣でありました。

「君ちやん、御最負があるよ」

樂屋ではお角が長い煙管から煙を吹いて

「着物を着替へて面を直したら、ちよつと御挨拶に行つておゐで、

正面の棧敷に頭巾を被つて、お伴の衆と一緒に見物しておゐでなすつた彼のお方さ、お前さんで無ければならないと仰有るんだよ、早く行つて御機嫌を取り結んでおゐで、ザラにあるお侍さんとは違つて事によつたら御城代様か御支配様あたりのお微行かも知れないよ、早く行つてお出で、柳屋に待つてゐらつしやると御家來衆がお沙汰に来て下すつたんだから」

「お伺ひしなくては悪いでせうか、誰か代りに行つてもらひたうござんすねへ」

「そんな事は出来ません、お前をお名指なんだから」

「それでも親方さん、お酒を飲めの、泊つて行けのと御冗戯を仰有ると、わたしにはお取持が出来ませんからね」

「いゝ時分には此方から迎へにやりますから安心して行つておゐで

なさい』

『お鶴さんか、お富さんが一緒に行つて下るといふけれど』

『あの人達は、まだこれから藝にかゝるんだから身體が明いてゐないよ』

『このまんまでは失禮でございますね』

『男衆の手も透いてゐないし、わたしが、ちよつと島田に纏めて上げやう』

『済みません』

『どうせ碌な事は出来やしないけれど手取り早いのでは若い時から自慢なのよ』

鏡臺の前でお角はお君の眞黒な髪を梳きながら

『君ちやん、お前の毛は良い毛だねえ、斯うして撫んでゐると指が

染まりさうだよ、さうしてお前さんには島田が一番よく似合つてよ

もう二三年すると丸髷が似合うやうになるだらう、わたしもお前さ

んを何時までも此んな處へ置くのは惜しいと思つてゐるんだよ、だか

ら早く何とかして上げたいと思つてゐるんだから、そのつもりで稼

いで下さいよ、そのうちに容貌望みで玉の輿といふやうな事もない

とは限らないから、下らないものに引掛らないやうに、口上言や折

助なんぞが、いくら色目を使つても白い齒は見せちや可けないよ、

その代り身分と身上の確かな人であつたら、年の違ひや男振などは

如何でも宜いから……』

こんな事を云ひながら親方の女は見てゐる間にお君の島田を結び上げてしまひました。

『それでは行つて参ります』

「あゝ、行つておるで」

親方の女は、また煙草を吹かしながら、自分が結んでやつた島田髷の手際を自分ながら惚々として見てゐます

「何だか一人では定まりが悪い、親方さん、あのムクを連れて行つても宜うござんせう、わたしはムクを連れて行きたい」

「ムクを連れて行く……ムクは此れから梯登りをするんじゃないか」

「それでもムクを連れて行きたうございますわ」

「子供のやうな事をお言ひでないよ、ムクの梯登りと火の輪くどりは呼物になつてゐて、あれで一枚看板の役者なんだから抜くことは出来ませんね」

「それでは、ムクの藝が済みましたらば、ムクをわたしの迎へに柳

屋まで寄越して下さいな、外の方が来て下さるのも宜いけれど、ムクを寄越して下されば、なほわたしは有難いと思ひますわ」

「それは藝が済みさへすればムクを迎へに出してやりますよ、それから三味線を忘れずに持つておるで、お客様にお好みが無ければ其れまでだけれど、持つて行つても邪魔にはなるまいから」

さう云はれてお君は手慣れた三味を抱えて小屋の裏を出ました。丁度、空が澄んで月が出てゐました。

時は秋の末でも小屋の中の蒸しあつい空気が外へ出て見るとひやりと身に沁みる寂しい心。

三味を抱えて客に招かれて行くわが身の影を見ると間の山の過ぎし昔が思はれます。故郷を出でて身は今甲州の山の夜の露。わずか三月とは經たぬ間に變れば變るものかな。それにつけてもムクを連れ

ないのが、何とも云はれず心細くて堪りません、古市の大樓へ招かれては、夕べあしたの鐘の聲を古調で歌つて聞かせる時、追つても叱つてもムクばかりは離れることも無かつたのに、今宵他郷で久しぶりに、三味を抱えて月にうつる我が影がたつた一つであることが悲しくなつてハラリと涙をこぼします……ムクは死んだわけでも殺されたのでも何でもなし、つい呼べば来る處にゐるのだけれど、お君は昔を思ひ出したからつい泣いてしまひました。

七

「役割、今日は一蓮寺のお開帳に行つて見やうぢやござんせんか」
 金助といつて小才の利く折助。
 「さうよな、度々呼び出しを受けてるんだから行つて見てもいゝ」

役割の市五郎は、金助から誘はれて一蓮寺へ出かけて見やうといふ氣になつたのは一蓮寺の祭の夜は大きな賭場が開けてゐるからです
 「お伴を致しやせう、お伴を致しやせう」
 二人は相携へて城内から一蓮寺をさして出掛けました。
 「神尾の殿様にも困りものでございますな、あゝなると手が附けられませんかからな」
 金助がいふ。
 「む、全く困りものだ、甲府勝手へ廻されたのを自暴であゝしておゐでなさるんだから何をするか知れたものじやねへ、金公お前抜からず目附をしてゐて呉れねへど困る」
 「へえ承知でございます、お頼まれ申した通り神尾の殿様のなさる事は一から十まで、わつしが方へ筒抜けになつてゐますから、今日

なんぞも一蓮寺の和歌の會へお出かけなさつて、まだお歸りの無え事まで、ちやんと心得てゐるのでございます」

「さうか、大將、もう一蓮寺へ出かけてゐるのか、では向ふへ行つて、變な處でぶつゝ、かるかも知れねえ、金公、こゝいらで一杯飲んで行かう、中へ入ると落着かねえから」

市五郎が先に立つて金助を柳屋といふのへ引張り込みました。

この別室には、問題の神尾主膳が、お君の來るのを待つてゐるとは知らないで二人は其處で一杯飲むことになりました。

「如何もおかしいぞ、彼處に供待をしてゐるのは、ありや確かに神尾の草履取」

金助は手を洗ひに行つてから席へ戻つて斯ういひました。

「それじゃ神尾が此家へ來てゐるのだらう、何處にゐるか當つて見

ねへ」

「宜しうございますとも」金助は得意の腕を見せるのは此の時だと思つて

「それでは役割、こゝは拙者が引受けますから、お開帳の方へは一人でお出かけなすつてお呉んなさいまし」

それとは知らず別の座敷で神尾主膳は

「苦しくない。お君、初對面ではあるまいし馴染の上の其方、遠慮は要らぬ」

馴染と云はれてお君は思はず面を上げました。併しごう思ひ返しても、こんなお侍に馴染と呼ばれるほど最負にされた覚えはありません。

「お前の方で見覚えのないのも無理はない、此方ではよく覚えてゐる、伊勢の古市の備前屋でお前の面を見て、よく覚えてゐる、珍しい處で合つたから其れで昔馴染のやうな氣がしてツイ、そちを此處へ呼んで見る氣になつたのじやわい」

「まあ左様でございましたか伊勢の古市で……」

そこでお君も思ひ當る、思ひ當つたけれども、古市で呼ばれた客の數は多數であります。このお侍が其のうちのドノお客であつたかといふことは、お君の記憶に残つてゐませんでしたけれども、あの時分に最負を受けた事のあるお客とすれば、やつぱりそれでも昔馴染。

「それとは存じませす失禮を致しました、お忘れなく御最負下されまして重ね々有難う存じまする」

「それで宜しい、こゝへ来て盃を受けて呉れ、そして久しぶりであの間の山節をまた一曲聞かせて貰ひたい」

「恐れ多うございますから此方で」

「何故其のやうに遠慮をする」

敷居より内へは入らないお君、それをもごかしがつて神尾主膳は豊叩く、

「あの、お座敷では恐れ多うございますからお庭先で御機嫌を伺つた方が手前の勝手にござりまする、あの古市で致しました通り、このお庭で御挨拶を申し上げます」

「成程、古市では座敷へ上がらずに庭へ蕙を敷いて聞かせて呉れたな、併しそれはあの土地の慣例であらう、こゝへ来てまで其の慣例を守らうとは恐かな遠慮」

その時に此の庭の石燈籠の影で人の氣配がするのを神瓦主膳は早くも見咎めました。

八

金助と離れた役割の市五郎は、ひとりで、例の女輕業の見世物小屋の前までやつて来ました。

「成程、これが評判の女輕業か一つ見てやらう」

懐手をしてヌツと木戸番の前を通り抜けやうとして木戸を突かれました。木戸番も役割とは知らなかつたものか、それとも知つて居ながら面が憎かつたものか、兎に角市五郎がヌツと懐手で中へ入らうとするのを押へてしまつて、

「旦那、お錢をたゞきます、木戸錢をお拂ひ下さいまし」

と云つたから市五郎納まらないで

「やい、面を見て物を云へ」

ウンと木戸番を睨みつけましたが、本戸番とはいへ、多少江戸ッ兒の氣風を持つてゐたものと見れば、肝腎の市五郎の面を見て却てフ、ンと笑つてしまひました。

市五郎に取つては容易ならぬ侮辱ですからムカツと怒つて、ボカリと一つ木戸番の横面を撲りつけました。

「この木偶の坊、巫山戯た眞似をしやがる」

木戸番は飛び下りて市五郎の横面を撲り返しました。

「此の野郎、俺を見損なつたな、俺は役割だ、城内の役割だぞ」

「役割だか薪割だか知らねへが、あんまり巫山戯た野郎だ」

木戸番と役割どが其處で組打を始めてしまふと、最初から此の近い

處ところにゐた口上こうじやうい言いひや出方でかたや世話役せわやくの連中れんちゆう、これもあんまり市五郎いちごろうが横柄おうへいで亂暴らんぼうだから飛とんで來きて、

「おい、役割やくわりさんだといふじやないか、役割やくわりさんを撲なぐつては可いけねわ」

仲裁ちゆうさいする振ふりをしてボカリと撲なぐります。

「役割やくわりさんに失禮しつれいをしては濟すまねへ八公謝罪こうあやまつてしまひな」

と云いつてまたボカリと撲なぐります。

「薪割まきわりならば幾いくら撲なぐつてもいゝけれど、役割やくわりさんを撲なぐるやうな事ことがあつては後あとで申譯まをしわけがないから早はやく手てを放はなしたり」

と云いつてはボカリと撲なぐります。

「役割やくわりを撲なぐるのは善よくねへ、役割やくわりを十八じゅうはちも撲なぐるなんて其そんな事ことがあるものか、せめて十三位じゅうさんゐにして置おけ」

續つづき様にボカと撲なぐりました。木戸きどの前に居ゐた見物けんぶつも、どちらか

と云いへば見世物みせもの側に同情どうじやうがあつて、市五郎いちごろうの大面おほづらを憎にくがつてゐたのですから、さうなると面白おもしろがつて、

「お前方まへがたは役割やくわりを撲なぐるなんて、飛とんでもないことをする、まあ俺達おれたちに任まかして呉くれ」

と云いつては市五郎いちごろうをボカと撲なぐる、氣きの毒どくなのは市五郎いちごろうで、ボカボカと八方はうほうから拳こぶしの雨あめを蒙かぶつて、半死はんし半生はんしやうの體ていにまで袋叩ふくろたたきにされてしまひました。

「覺おぼわてゐやがれ、役割やくわりの市五郎いちごろうに、よくも恥はぢをかゝせやがつたな」
役割やくわりが撲なぐられたといふ噂うはさが八方はうほうへ散ちると、丁度ちやうど、その邊へんの賭場さばや何なにかに集あつまつてゐた多數たすうの折助をりすけが其それを聞ききつけたからソレと云いつて飛とび出して來きました、それで事ことが大おほきくなりました。

折助連中といへども、さう役割ばかりを有難つてゐるものはない、中には市五郎がテラを取つたり頭を刎たり自分ばかり甘い汁を吸つて、こちと等にはケチで、その癖、忌やに大物ぶつてゐるのを面憎がつてゐるのもあるのですから、市五郎が此處で撲られた事を却て面白がつて、都合によつては自分も大勢と一緒に袋叩きの方へ廻らうといふ連中もないではないのですから事情を聞けば、騒ぎは其んなに大きくならなかつたかも知れませんが、何しろ役割も市五郎ばかりではなく、中には人望のある役割もあるのだから、その何れの役割が撲られたのか、次第によつては折助一統の面にかゝはると思つて博奕半で飛び出すと、かねて折助と懇意にしてゐる遊び人連中が其の加勢にと飛び出して此と女輕業の前へ押寄せて來ました。斯うなると、此の女輕業一軒ではなく、すべての見世物小屋がバツ

タリと商賣を止めて、女藝人や年寄は避難させ、丈夫さうな奴だけが合戦の用意をはじめます。長井兵助などは長い刀を頻りに振廻しました。

けれども騒動の中心になつたのはやはり娘輕業、木戸も看板も滅茶滅茶に叩きこわされて木戸前で組んずほぐれつしてゐた群集はドツとばかりに場内へ亂入してしまひました、其處で、また敵味方、彌次馬諸共に、入り亂れて撲り合ひ噛み合ひになりました。見物の中で血の氣の多いのは頼まれもしないに彌次馬の中へ飛び込んで喰ひ合ひ噛み合ひます、幸ひに見物の中に氣の利いたのは蕪張や板圍ひを切りほごいて女子供を其處から逃がしたから怪我人は大分あつたけれども、見物から死人は出さないう一通りは逃がしたけれども可哀相に輕業をする美人連は、逃げ場を失ふて、櫓の高みや輕

業の臺の上に固まつて高みから泣き聲をあげてゐました。

『まあ如何しやうねへ、お國さん、おやまさん、あれ家の男衆が皆んな殺されちまうじやないか、わたし達は如何なるんでせうねへ、親方さん、ごうしませう、助けて下さい、助けて下さい』

『其んなに騒がないで静かにしておゐて、其のうちにお役人が来て鎮めて下さるから、何だね、お前達は其んな意氣地のない、日頃危ない藝當をして命の綱を渡つてゐる癖に、もう少し確かりおし、愈の時には梁を傳はつても逃げられるじやないか』

『それでも親方さん、危ない、如何しませうねへ、力持のおせいさん、お前は力持だからわたしを負つて逃げて下さいな、わたしはお前さんの影に隠れてゐるわ』

平常は危ない藝當を平氣でやつてゐる輕業の美人連も、實地の修羅

場では、如何していゝか解らないで一固まりになつて慄へてゐると其處へ一手の折助と遊び人どが梯傳ひにわーつと集まつて來ました

『あれ、下へ來ましたよ、怖い、親方さん、力持のおせいさん』
美人連は號泣する、折助共は先を争そつて梯子から此の美人國へ亂入しやうとして、わーつと喚いて折重なつて梯子から落ちました。それは力持のおせいさんが、今ま必死の場合に商賣物の立白を目よりも高く差上げて投げて落すと、押に打たれた折助十餘人が一度に轉び落ちたものです。

立白の一撃で、折助共も少し萎んだが、直ぐに盛返して梯子や小屋掛の丸太を足場にして續々と登りはじめました。上からは有り合すもの、衣裳葛籠、煙草盆、煙管、茶碗、湯呑、香箱の類、太鼓、鼓笛や、三味線までも投げて投げ盡したが、もう立白のやうな投げて

投げ甲斐のあるものがありませんでした。力持のおせいさんは、鐵の棒を舞臺に置いて来たことを齒齧をして口惜しがるけれども、ここには最早薙より外に獲物が無くなつてしまつたから、己を得ず薙をクル／＼と捲いて其れを打ち振り打ち振つて登り来る奴ばらを惱ましてゐます。

下では、折助と遊び人と木戸番と口上言ひと出方と彌次馬とが組んづほぐれつ揉み合つてゐると、近所の小屋からまたく加勢が来る彌次馬が来る、それを他ににして、この美人連の隠れ家を見付出した連中は可い氣になつて此の一角を占領して、美人連を分取らうとの興味から、蟻の甘きに附くが如く、投げられやうと拂はれやうと離れることではありません。

それと見て親方のお角は齒咬みをしながら

「さあ、皆んな何でもいゝから刃物をお持ち、剃刀も此處に五挺ばかりあるから分けて上げるよ。舞臺で使ふ脇差、刃引がしてあるけれども、此れでも無いにはマシだよ、傍へ寄つたら其の剃刀で面でも腕でも何處でも拘はないから、無茶苦茶に切つておやり、其の脇差は切れないんだから突つておやり、眼玉でも鼻でも何でも遠慮することはないから突つておやり、何にも持たない人は簪を確りと持つてゐて、いよく傍へ来た時に面の真中へ突き通してやるんだよ、若し刃物を取られたら喰付いておやり、何處でも拘はず喰付いて引掻いておやり、おせいさん、お前は力持だから、お前を皆んなが恃みにしてゐるよ、確かり頼みますよ、お前さん一人で十人も廿人も手玉に取つておやり、お前さんは刃物を持たない方がいゝよなに、わたしだつて五人や十人は相手にして見せるからね、高の知

れた折助なんぞに、此の身體へ指でもさゝれて堪まるものか』
お角は剃刀一挺を手に持つて頻りと一座の美人連を勵まして、自分も城を枕に討死の覺悟。

力持のおせいさんは此れに勵まされて、持つてゐた薙を抛り出し、素手になつて、登り来る折助ばらの鼻向、眉間、眞向を突き落し撲り落す、その他の連中も、剃刀、脇差、簪の類、獲物々々を確かりと持つて必死の覺悟。

「あれー火が附いた」
吊られてあつた篝火が、誰が切つたか地に落ちて其れが小屋の一角に燃わうつる、誰も消す人はない。

「あれ親方さん、火が、この小屋が焼けてしまひますよ」
火を見た美人連は、折角勵まされた勇氣が一時に沮喪しました。

薙張りと幕と板圍ひの小屋、火の手は附木を焼くよりも早い、メラメラと天井まで揚る赤い舌。

「そうれ火事だ」

組んづほぐれつしてゐた命知らず、さすがに火には驚いて、組打をしながら逃げやうとして一層の大混乱。美人連を取り圍んだ一隊は早く攻め落して分取を恣まゝにしてから火を避けやうと強襲また強襲。

火の威勢が、いよ／＼天井を這ひ上つて黒い煙と白い煙が場内に濛濛と湧き出した其の中から、

「うわーう」

旺盛として物の吼ゆる聲が起りました。これは獸の吼る聲、此の場の人間共の怒號叫喚愚劣迷亂を叱咤するやうにも聞きなされて、思

はず身の毛をよだてる程の一聲でありました。

ムクは強いけれど可哀想に鎖につながれておりました。こんな騒ぎになる前に誰か氣を利かして鎖を解いてやれば宜かつたものを、その方には誰も氣が着く者がなかつたから鎖につながれたまゝでゐるうちに、火が其の背後から燃え出しました。

『あゝムクが繋がれてゐる、ムクは強い犬だ、誰か行つて鎖を解いてやらなくては焼け死んでしまふ、可哀想に、誰かムクの鎖を切つておやりよう』

お角は氣がついて高い處から叫んだけれども、組み合ひ押し合ひで誰も其れに應ずるものがありません。

猛犬ムク！お角もよく其の猛犬であることは知つてゐます。ムクが吼えると牛や馬までが凍んでしまつた事も此の道中で實見しました

ムクが通ると街道の何れの犬も尾を捲いて軒の下へ隠れてしまつたことも知つてゐました。桂川筋で一座の女が一人、橋を渡るとて誤つて川へ落ちて押し流された時、あれよくと騒ぐ人を駆抜いてムクは水中へ飛び入り着物の襟を咬えて難なく岸へ飛び上つた事も實見してゐます。旅藝人に因縁をつけたがる雲助や破落戸の類が、強い面をしてやつて來た時にムクが居て、ジツと其の面を見ながら傍へ寄つて行くと、雲助や破落戸の啖呵が凍えて物にならなかつた事も再三あるのを心得てゐました。猛犬ムクは第一にお君に取つて忠實な家來であると共に、此の一行に取つては二つとなき勇敢なる護衛者であつた事を、お角は今の此の場合に於て思出さないわけには行きません。

『ムクを解いてやりさへすれば、こゝに居る拆助共なんぞ幾人來た

つて怖くはない、ナゼ早く其處に氣が着かなかつたらう、力持のお
 せいを待みにするよりは彼のムクの方がドノ位強いか、あゝ早く鎖
 を解いて此の奴等に喉しかけて噛み散らかさしてやりたい、誰かム
 クの鎖を解いてやるものはないか』

お角は自衛の剃刀を逆手に持つて、一方には寄せ来る折助の強襲に
 備へて味方を囮まし、一方には繋がれたムクの方を見て焦れに焦れ
 たが、

『えゝ、仕方が無い、あゝして置けばムクは焼け死んでしまふ、お
 せいさん、力持のおせいちゃん、お前はわたしに代つて此處を守つ
 て皆んなの指圖をしてお呉れ、わたしは今ムクを助けて来るから、
 ムクの鎖を解いて来るから』

『親方さん、危ない』

『ナニ大丈夫だよ』

お角は剃刀を口に咥えて、着物の裾をキリ／＼と捲くる。
 今でこそ一座の親方になつて自分は舞臺へ立たないけれども、お角
 も此の道で叩き上げた女、高い處から舞臺の方を見下して人の頭の
 薄い處を見定めてヒラリと躍らして飛び下りた身の軽さ。

お角が下へ飛び下りたのを見ると、

『それ美しい女が飛び下りた』

登りあぐねてゐた折助が折り重なつてお角の方へ抱ついて来る。

『何をしやがるんだい、折助奴』

剃刀を振ると、鼻梁を横に切られた折助の一人が、呀ッと言つて面
 を押へる、紅毀のやうな血が玉になつて飛ぶ。

『この阿魔、太え阿魔だ』

多勢の折助が、お角一人に折り重なり折重なつて取りつく、

「何をしやがるんだい、お前達の手に合うやうな軽業師とは軽業師が違うんだ、ざま見やがれ」

お角は血に染みた剃刀を打ち振つて群がり来る折助の面を望んでは縦一文字、横一文字に斬つて廻る、けれども、多勢を恃む折助、賭博打ち、後から後からと押して来る、揉まれくつてお角の帯は解けた、上着は這り落ちる、其れを引張る、引ちぎる、眞白な肉、お角は其の覺悟で、下には軽業の娘の着る刺繡の半股引を着けてゐた、剃刀一挺を獲物の死者狂ひ、髪が亂れ逆立つて、半裸體で荒れ狂ふ有様、物凄いはかり、併しいくら氣は焦つても多勢の男に一人の女お角の剃刀は、いつか打ち落されてしまふと、忽ち手取り足取り「口惜しいツ」

お角は齒噛みをしたが最早如何ともすることは出来ません、斯うしてお角を取つて押へた折助共は、忽ち胴上げにして関の聲を揚げて表の方へ擔ぎ出す、高い處で其れと見た力持のおせいさん。

「あれ親方が捉まつてしまつた、この野郎共覺えてゐる」

城を守ることに任務を忘れて、お角を折助共の手から取り戻すべくやつと聲を掛けて力持のおせいは高い處から飛び下りるには飛び下りたが——これは軽業が本藝ではない力持専門であるから、ヒラリと身を跳らしてといふわけには行きませんでした。たゞお角の危急を見て夢中でドシンと飛び下りたのは臼を轉がしたと同じことだから、下へ落ちてても暫く起き上がる事は出来ないのを、それと云つて多勢が寄つて集つて押へる、いくら荒れても俯向きに落ちた處を上から押しつぶされたのだから動きが取れないのであるうちに、演藝用

の綱渡りの綱を持つて来てグル／＼と縛つて難なくこれも生捕。主將、副將共に捕はれた後の美人連は、慘憺なものであります。羊の中へ狼が亂入したやうに一溜もなく引抱えられて引擔がれる、泣き叫ぶ狂ふ。

真先に多勢に擔がれて行くお角は、齒を食ひしばつて

『口惜しいツ、ムクは如何したらう、何だつてムクに氣が着かなかつたんだらう、早く氣が着いてムクの鎖さへ解いてやつて置けば、此んな事は無かつたんだ。斯うと知つたら君ちやんにムクを附けてやれば宜かつたものを、今となつては仕方がない、誰かムクを助けてやつて下さい、ムクの鎖を解いてやつて下さい、さうすれば斯んな折助なんぞ幾人來たつて此んな口惜しい目に會やしないのにムクを、ムクをムクの鎖を解いてやつて下さいよう』

聲を限りに叫びました。

九

お君が神尾主膳に柳屋へ呼ばれて三味線を取直した時に此の騒ぎが起りました。

お君は三味の絲を捲く手を留めて、

『何でございませう、あの音は』

廊下をバタ／＼と駈けて來た女中が

『喧嘩でございます、あの女輕業の小屋の内へお仲間衆が押し掛けて、今大騒ぎが持ち上がったのでございます、人死が出來ました、

火事になりました』

『あの女輕業の小屋へ城内のお方が押し掛けてあの騒ぎ、それは大

「變、斯うしては居られませぬ」

お君は三味線を投げ出して立ちかける、其の袖を神尾主膳は押へて

「あの騒ぎの中へ一人で行つては危ない」

「危なくても宜しうございます、斯うしては居られませぬ、ごうぞ

お暇を下さいまし」

神尾主膳の袖を振り切つたお君は三味線も撥も投げ出して跣足で飛

んで歸りました。

「あゝ、大變な事、火が附いてしまつた、此んな事ならモツト早く

來れば宜かつた」

お君の來て見た時分には小屋の裏手へ一面に火が廻つてゐます、表

へ廻ると、小屋の中から雪崩を打つて押し出す群集。

「あれまあ、親方さんが擔がれて、力持のおせいさんまでが彼して

まあ、皆んな娘達が連れて行かれてしまふ、何といふ亂暴な人達

でせう、これはまあ如何したんでせう、誰も助けて上げる人はゐな

いのかしら、ごうしたものでせうね、あれ、何處へ連れて行かれ

るんでせう、わたしはまあ如何したらいいでせう」

その時に、猛然として火の中より起るムクの聲。

「あゝ、さうだ、ムクだ、ムクは何をしてゐるんだらう、皆ながあ

んな目に會つてゐるのにムクは何をしてゐるんだらう、おゝさうさ

うムクは藝が濟むと、いつもあの鐵の棒につながれてゐたから、事

によると、あのまんまで誰も氣がつかないで、ムクを鎖で繋ぎ放し

にして置くんじゃないかしら、それだと幾らムクだつて動けやしな

い、皆んなが彼んな目に遭つても助けてやりたくても助けられやし

ない、きつと左様だ、ムクは繋ぎ放しにされてゐるに違ひない、そ

んならムクは人を助けるどころではない、自分が此の中で焼殺されて終うじやないか、可哀相に、ムクが可哀相だ、ムクやムクや』
お君はムクの名を連呼して轟然に此の火の中へ飛び込んでしまひました。煙に捲かれる事も、火に煽られることも考へる餘裕はなくてお君は火の中へ飛び込んでしまひ

『あゝ、ムク、怪我をしないでゐてお呉れかい、鎖につながれてゐるだらうね、今解いて上げるから待つてお出で』
袖で面を隠して煙の中に駆け込んだお君の手が鎖にかゝると、ムクは五體が張り裂けるばかりの身震ひをしました。

『あゝ、早く逃げやう、逃げてお呉れ』
難なく鎖が外されるとお君とムクとは丸くなつて此の小屋の火と煙の中から逃げ出しました。お君には、もう逃げ場がわからなかつた

がムクはよく知つてゐる、犬と人とは辛うじて火の外へ逃げ出して
『わたしは宜いから、早く親方さんや、娘達を助けておやり、わたしは最早大丈夫だから早く、お前、皆んなの娘たちを助けて上げてお呉れ、悪い奴に擔がれて向ふの方へ連れて行かれたんだから、早く……』

+

女輕業の連中を引擔いで來た折助共は、闇に紛れて荒川の土手、葎や篠の生えた處まで來てしまひました。
土手の蔭へ女輕業の連中を珠數つなぎにして置いて、

『さあ、大變な騒ぎになつてしまつた、これから先を如何するのだまさか焼いて喰ふわけにも行くめね、さうかと云つて此處まで持つ

て来たものを、抛りばなしにして逃げて行くと娘達が蚊に食はれてしまふ、繩を解いてやれば、最前のやうに荒れ出して始末に行かぬえ何とか面白い工夫はないか』

『成程、斯うして置いて蚊に食はせてしまふのも残念なわけだ、繩を解いてやれば荒れ出す、其のうちにも此の力持と来た日には三人や五人では手に負えねえ、また身の軽い方は商賣柄だから、こゝらの田甫へ突ん逃げたら蝗を捕まへるやうな手数がかゝる、如何したものだ』

『宜い事があるわい、一度に繩を解いてやると物騒だから、一人づつ繩を解いてやらうじやねえか、こゝにゐるおれ達仲間と、女の仲間と數を讀み合はせて置いて、籤引とやらうじやねえか、籤を引き當た順で、この女達を片つ端から一人づゝ連れて、何處へでも勝手

な處へ屈けてやる事にしたら面白からうじやねえか』

『其奴はい、處へ氣が着いた、籤引にしやう、籤引はい、けれど、この力持なんぞを引き當てたら災難だ、下手な事をやれば此方が却てギユウと潰されてしまふんだから、あんまりジタバタさせねえやうに、物和かに道行といふ寸法に行きてへものだ』

『物和かに道行といふ寸法に行けば其れに越した事は無えが、お互に和事師といふ面でも無えし、兎に角、籤として見やう、籤を引いて見た上で、また何とか面白い趣向があるだらうよ』

『籤を引く前に斯ういふ趣向は如何だ、手荒い事をしなくても、女を逃さねえやうにするにはする法がある、それは裸にして置くことだ、裸にして置けば、女は恥しがつて何處へも逃げやしねえ、さうして置いてから籤を引いた方が宜からう』

「成程、おれ達の仲間には智者が多い、裸にして置けば女は暗い處に居たがつて、明るい方へ世るのを忌がる、それは宜い處へ氣がついた、それは宜い心がけた」

折助はとう／＼斯ういふ決議をしてしまひました。

「さう定まつたら、悠くりするが宜い、誰か火種を持つてゐねえか一吸やつてから仕事にかゝりてえ」

この時一蓮寺の境内で盛んに燃えてゐる見登物小屋の火の手を心よげに折助共が見返つて、それから悠々仕事にかゝらうと云つてゐる途端に

「あつ、何だ、如何したんだ、えつ、如何したと云ふんだ痛い！」
暗中模索、折助共が引繰返り且引繰返り何を如何したのか一時に混亂して騒ぎ出しました。

「やつ、狼だ、狼だ、狼が出て來やがつたぞ、ソレ大變だ」

山國にゐると狼の怖るべき事を誇張して聞かされます。その狼の來襲と聞いてさしもの折助共が總崩れに崩れ立つたのは無理もないことです、鳥の羽音でさへ大軍を走らすのだから狼の一聲が折助を走らすのは誠に無理もない事でした。

事實また、此の眞暗な中へたしかに眞黒な怪物が音も立てずに飛び込んで來て、ヒラリ／＼と飛び違へながら、當るを幸に折助を噛みつぶし噛みつぶして廻る早業は、たしかに類を呼ぶ千足狼の類がよき獲物ござんなれと、一舉に襲ひかゝつたものどしか思はれま

せん。
それ狼！と云つて總崩れに崩れて逃げ出したから、まだ幸でした。もし愚圖々々してゐて、それは狼ではない、犬だ何んぞと正

體を見届けたつもりで踏み止まらうものならば擧げて一人も残さず折助が噛み伏せられてしまつたに違ひない。それでも一人か二人の死人を残し、多数の怪我人を出して、逸早く此の場を逃れ得たのが幸でありました。

併し、可哀想に輕業の女達、折助は逃げ去つたが今度は一層怖ろしい骨までしやぶる獸、その襲撃と聞いて齒の根が合はなくなりました。けれども其の怖ろしい獸は、存外女達にはおとなしくありません。

縛られて齒の根の合はない女達の傍へ寄つてクフン／＼と鼻を鳴らして狎れて來るのが不思議であります。

「おや、ムクだよ、ムクが來て呉れたんだよ、ムクが助けに來て呉れたのだよ」

親方のお角が先づ斯ういつて叫び出した時に、女達一同の恐怖の念が歡喜の聲と變りました。

眞先にお角の身にかけてられた繩に牙を當て、グイと引くと、お角の繩は無雜作に外されました。

「まあ、ムク、よく助けに來て呉れたねへ、ほんとにお前はわたし達の命の親だよ」

お角はムクの首を抱えてしまつて、さすが氣丈な女が聲を揚げて泣きました。一人の身が自由になれば、あとは皆んな樂に解放されてしまひます。

新うして美人連はムクに助けられて再び一蓮寺の境内へ歸つて來た時に火事は鎮まつたけれども、餘炎はまだ盛んなものでした。火消も來たり役人も來たりして騒動はスツカリ納まつてしまひましたが

お君の姿を何處へ行つたか見出すことが出来ません。

十一

「それじや、何かい、如何しても江戸へ出かけるのかい」

宿で七兵衛とがんだりきの會話。

「兄貴、色々とお世話になつたが、江戸へ出て一旗揚るつもりだ、がんだりきも此處等が年貢の納め時だから小商賣の一つも始め飯盛上の女房でも連合にして、これからは温和しく暮らして行きてえものだと思はねへ事もねへが、天道様が左様は卸ろして呉れめへからトテもの事に、また逆戻りで、疊の上の往生は覺束ねへだらう、何方が早いか知れねへが何分お頼み申すよ」

「成程、お前も腕一本取られたのがあきらめ時だ、江戸へ落着いた

ら、そんな事で疊の上の往生を專一に心掛けて呉んねへ、若しまた、

自分は其のつもりでも世間が承知しねへ時はまた其の時の了見だ」

「俺も其の了見で、此れから生れ代るつもりだ」

「餞別といふ程でも無へが、裏街道を通つて萩原入りから大菩薩峠を越す時に、峠の上の妙見堂から丑寅の方に大きな栗の木があるから其の洞の下を五寸ばかり掘つて見て呉れ、小商賣の資本位は其處から出て来るだらう」

「折角だが、そいつは止さう、悪銭身に着かすといふ事になると幸先が宜く無へからな」

「悪銭といふのも可笑しなものだがそれじやお前は性質のいゝ資本を持つてゐるのかい」

「一文なした、江戸へ出る小遣も無え位のものだ」

「腕もなし、資本もなし、それで眞人間にならうといふのはちつと無理だ、今奉公に出ればと云つて、其の腕じやあ誰も使ひ手はあるめえ」

「何とか成るだらうよ、運だめしだから、一文なしで出かけて行つて見やう、途中でのたれ死をしたら其れまでよ」

「其の了見なら其れでいゝ、自分はそれでいゝけれど、若し人のかかはり合で金が無ければ男が立たねへといふやうな時節があつたら遠慮なく俺の土藏から出して使つて呉んねへ」

「兄貴、大層なことを云ふが、お前の土藏といふは何處にあるんだ」
 「それは今云ふ裏街道では大菩薩峠の上、青梅宿の坂下、江戸街道の丸山臺、表の方では小佛峠の二軒茶屋の裏の林の中と府中のお六所様の森の後と、日野の渡し場に近い處、まあ此の繪圖面を見て置

くがいゝ、江戸から持つて來た金は裏の方へ藏つて置く、甲州で稼いだのは表の方へ預けて置くんた、幾らになつてゐるか自分でも其の額はわからねへが、あゝして置いても利息がつくわけでは無へから入要の時は、いつでも出して遣つて貰ひてへものだ」

「成程、兄貴の仕事は中々手堅いや斯うして娘を彼方此方へ片附けて置けば、いざといふ時何處へ飛んでも居候が利く、だが、此の繪圖面は見ねへ方が宜かつたな、これを見た爲に折角の梁婆氣が立ちおくれをして、どうやら元のがんりきに戻つてしまひさうだ」

「俺は、そんなつもりじや無へんだ、お前に此の金を器用に使つて貰へば金の冥利にもなるし、罪ほろぼしにもなるんだから、それで手一杯に地道な商賣をして、世間に融通をして貰ひてえんだ」

「其れじや、ドノ道此の繪圖面は貰つて置かう、併し、これに手を

つけるやうじやあ、がんだりきもやつぱり疊の上では死ね、え、それ
じや兄貴、これから出かけるから、壯健で居て呉れ」

「さうか、さう定まつたら引留めもしねへが途中随分氣をつけて、
猪や狼に食はれねへやうに」

「裏街道を行くつもりではゐたが、夜道は表の方が無事だから、や
つぱり表を突切つてやらう、今から出りや夜明けまでに江戸へ入る
のは楽なものだ、そのつもりで、最前、握飯を三つ四つ拵へて貰つ
てあるから、あれを嚙ちつて江戸まで行けば、それから先はお膝元
だ、ごつちへコロげるかがんだりきの運試し、兄貴また彼地で會はふ」
「江戸へ行つて居所が知れたら、神田の明神様へ額を納めて置いて
呉れ、めの字を書いた繪馬を一枚、そのうらへ處番地を書いてお堂
の隅つ子へ抛り込んで置いて呉れ、訪ねて行くから」

「合點だ」

「おや、表が何だか騒々しいな」

二人は云ひ合せたやうに耳を傾けて

「半鐘が鳴るせ」

「火事だ」と云つてるよ、姉さん、火事は何處だい」

「一蓮寺でございますよ」

「一蓮寺、おや、喧嘩だ」と云つてるせ」

「成程、喧嘩らしい、火事と喧嘩とお祭祀と一緒に來たんじやあ事
だ」

がんだりきは片一方の手で脚絆をひねくる、それを七兵衛は他から穿
かせてやつて、身輕な扮装が出來上りました。

二人が外へ首を出して見ると、火の子は此の家の上を燎亂と飛んで

います。

それとはまた違つた處で其の翌日、最初にあの騒ぎの口火を切つた
役割の市五郎が寝てゐる處へ見舞に來た金助

「役割、どうでござんす、痛みますかね」

「うん」

「飛んだ御災難で」

「忌々しい奴等だ」

「役割を見損なつて木戸を突くなんて、盲蛇物に怖ぢずとは此の事
だ、その代り、散々、敵を取つて、奴等を空裸にしてやりましたか
ら其れで胸を晴らしてお呉んなさいまし、身から出た錆とは云ひな
がら、彼奴等こそ小屋は焼かれる衣裳道具は臺なし、路頭に迷ふや

うな騒ぎで手んテコ舞をしてゐやがる、ざまア見ろ」

「狼が出て苛い目に遭つたてへじやねえか」

「狼には罷りましたね、怪我あした奴等は大部屋で一々手當をし
てゐますが、片輪者が大分出來上りさうで、面を噛み潰されて如何
にも始末に行かねへのが五六人ありますよ、あんなのこそホンとに
面目玉を踏み潰されたとか噛み潰されたとか云ふんだらう、それに
比べりや役割、こちと等は災難が軽い方でござんすよ」

「まあ俺の方は俺の方でいゝが、金公、手前こそ命拾ひをした上に
俺の命を拾つて呉れたんだから廻合せがよく出來てゐる」

「役割から言ひ付けられて、神尾の殿様の容子を見やうと石燈籠の
蔭で隙見をしてゐる處を取捉まつて、すんでの事に息の根を止めら
れやうとする處を不意にあの騒ぎで、神尾の殿様も、こちと等を構

つちや居られず、急にお立ちとなつてしまつたから命拾ひをしたつもりで騒ぎの方へ飛んで行つて見た時分には、人間の騒ぎは濟んだけれども、火の威勢が馬鹿に強くて、通り抜けられねへから迂路迂路してゐると役割の死骸……じやあ無かつた、役割が打倒れてウン言つておゐでなさるから、此奴は大變だと肩に掛けて引張て逃げると、拾ひ運のいゝ日はいゝもので、役割の命を拾つた上に、もう一つの拾ひ物、それは斯ういふわけなんですよ、わつしが役割を肩に引掛けて煙に追蒐けられながら彼の椎の大木の處まで來ますとね、其處にまた人間が一つ倒れてゐるんです、尤も今度の人間は役割の前だが前に拾つたのよりもズツ綺麗なんですから、それこそホントウの拾ひ物で、其ん時、わつしは如何しやうかと考へましたね、椎の大木の下に倒れてゐたのは綺麗な女の子、女輕業の中でお

君といつて道成寺を踊る評判者、それが矢張役割と同じ事、死んだやうになつて倒れてゐるのを見付けたものですから、わつしは其處で考へたんで、一層の事、役割を抛り出して此の娘に乗り換へた方が得用だと、すんでの事に役割の方を諦めて終はうかと思ひましたよ、まあ怒つちやあけません一時はさうも思ひましたけれど本來わつし其も善人ですから其んな薄情な事は出來ません、と云つて一人で一度に二人の人を助ける譯には行きませんから、役割を大急ぎで稻荷の處まで擔ぎ出して置いて、それから取つて返して、其の女の子を首尾よく擔ぎ出しました、が此の方が餘つほど擔ぎ榮がしました、まあくお聞き下さいまし、その女の子はわつしの働いで宜い處へ隠して置きますよ、あいつはね、人質になるんですから、大事な代物ですよ、役割が快くなりなすつたら、御相談をするつもりで

わつしが宜い處へ隠して置きますがね、役割、これが癒つたら、彼奴を妾にしておしまひなさいまし』

十二

宇津木兵馬が單身で、白根の山ふところを指して甲府の宿を出かけたのは一蓮寺のあの騒ぎの翌日の事でありました。

秋もすでに晩く、國をめぐる四周の山々は雪を被つてゐます。風物と人の身の上を考へると兵馬にも多少の感慨があります。此の度こそはと思ふて、いつも心は勇むけれども、旅から旅を歩く間には随分果敢ない思ひをするのであります。

兵馬は此の頃になつて漸く七兵衛の舉動に不審の點を發見して來ました。片腕を落されたが、いふ男との話しぶり、その調子が

自分等と話をするのとは大分違つた處がある、七兵衛の舉動に合點の行かぬ節々を感じて見ると其處にも亦多少の心淋しさが湧いて來ないわけには行きません。

そこで、この度の山入りも七兵衛には置手紙をしたゞけで出かけてしまつて、白根の山めぐりをしてから後は、また次第によつては東海道筋へ廻るのだなど思ひつゝ歩いて行きました。

一蓮寺の境内を通りかゝつて見ると如何でせう、昨日あれほどに賑うた見せ物小屋のあたりは、すつかり焼けてしまつて、祭禮も臨時休業のやうな姿で、焼跡のまはりには消口を取つた仕事師の連中が立ち働いてゐる有様を見て、昨夜の火事は此んな大きな事になつたのかなど、舌を捲きながら通り過ぎてしまひました。それから荒川の土手の處を歩いて行くと、土手の上の雜草が踏み躪られて、血痕

があちらこちらに飛んでゐます。

兵馬は其れが正しく人間の血であるらしいから少しく驚かされました。人間の血であつて見ると四邊の草木の荒された模様から見て餘程の人数が入り亂れて争つたものとしか見えません、祭禮で氣が立つた餘り、ここで血氣の連中が大格闘をやつたものだらうと兵馬は心の中で推察しました。

此れは昨夜の折助の狼藉と女輕業の美人連の遭難、その血の痕といふのはムク犬の勇猛なる働きの名残であること申すまでもありませんが、その風聞は兵馬の耳へはまだ入つてゐませんでした。

其の土手の處も通り過ぎ龍王村といふ處へ出やうとする廣い畑の中間で

「頼むやう、助けて呉れ！」

白晝とはいへ、人通の餘り無い處で助けを叫ぶ人の聲

「頼む！頼む！助けて呉れ」

足を留めて見ると凡そ二町ばかりを距てた道の傍の柿の木と覺しい大きな木の上で頻りに助けを呼んでゐる者がある。

これはオカしい、木の上で、ひとりで呼んでゐる、氣狂ひではあるまいかと兵馬は思ひました。

木の上に登つて助けて呉れといふのは、大抵大水の場合に限るやうです。下を見れば水も何もありません、尋常平凡な畑道の中で、木の上から助けを呼ぶのはオカしいと思ひながら、宇津木兵馬は其の方へ急いで行つて見ると、木の下に眞黒な動物。

成程、犬に逐はれたな、狂犬だらう、大きな犬だ、あれに逐ひつめられて木の上へ登つて其處から助けを呼んでゐるといふのは笑止な

事だ、その聲を聞けば子供でもないやうだが、大の男が犬に逐はれて、助けて呉れは、いよく以て笑止な事だと、兵馬は微笑しながら木の下へ近くと、

「どうか助けて下さい、其の犬を追拂つて下さい、狂犬でございませ、この通り向脛を搔拂はれて、衣服なんぞもズタ／＼でございませ、すんでの事に命を取られる處をやつと此處へ逃げ上つたんでございませ、そこに附いてゐられちやあ逃げる事が出来ませ、どうか犬を追拂つてお呉んなさいませ、助けてお呉んなさいませ、木の上にあつた男は半狂亂で叫んでゐます。」

「叱！」

兵馬が犬を叱ると、犬は首を振り向けてブルツと身を慄はせました。其の時

「見たやうな犬だ」

兵馬は一見して其の非常なる猛犬である事を知り同時にまた何處かで見つた事のあるやうな犬だとも思ひましたけれど、咄嗟には其れと思ひ當ることありませんでした。

「叱！」

兵馬は小石を拾つて覗きをつけると犬はまた後退りして、兵馬の面を睨みながら唸る。

「叱！」

兵馬は石を振上げて追ふ、犬は少しづつ後退り。

「どうか其の犬をお斬りなすつて下さい、お腰の物で二つに打つ斬つてやつてお呉んなさいませ、とてもく、石なんぞで驚く犬じやございませ、斬つて終はなけりや駄目でございませ、どうかお斬

りなすつてお呉んなさいまし』
木の上では男が喚く。

『エイ』

兵馬が打つた石礫、猛犬の額に發矢と當る。犬は一聲高く吠えて飛び退き、爛々たる眼を以て、遠くから兵馬を睨む。二つ目の石を兵馬が振り上げた時に、何と思ふたか犬はクルリと廻つて、兵馬の面を睨みながら應揚に後へ引いて行く、犬は兵馬の面と其の手中の石とを見比べながら、徐々と引上げて行く態度、丁度、名將が戦ひ利あらずと見て、味方を繰引きに引き上げる兵法が此の態度であらうと、兵馬は敵ながら獸ながら其の退却振の雄大にして痛快なのに感心せずには居られませんでした。上杉謙信が退却する時には此んな陣立であらうかどさへ思はせられました。

『石なんぞで驚く犬じゃございませぬ、打つた切つてお呉んなさいまし』

木の上でガムシヤラに叫んでゐるに拘はらず、兵馬は此の石で犬を逐ひ、犬は遂に兵馬に逐はれて何處へか行つてしまひました。

『何處の畜生だか知らねえが、人を脅かしやがる畜生だ、この近所ではついぞ見かけた事の無え畜生だが、いやはや、馬鹿と狂犬ほど怖いものはないと太閤様が申しました』

木の上から下りて來た男を何者かで見れば、これは先程役割の市五郎を見舞つた折助の金公でありました。さすが定まりの悪い面をして、それでも兵馬に禮を述べるより先に犬の悪口をはじめます。

『何だつて旦那、わつしが此の村へちつとばかり用事があつて甲府から出かけて來ると其處の森の中から、のそりと飛び出して來やが

つたのが此の犬でございます、何だか氣味の悪い眼つきをして、わつしの面を見詰ながら後を食附いて來るでせう、癪に觸るから今旦那がなつすたやうに石を振り上げて追拂はうとしますと、彼奴が凄い聲で唸りましたね、その聲でブル／＼と、わつしは慄え上がつてしまひましたよ、旦那のやうに睨みが利きませんから逃げ出しました、到頭此處まで追ひ詰められてこんな怪我をした上に、御覽なさい着物の裾なんぞは此の通りズタ／＼でございます、ほんとに忌々しい畜生つたら』

金助は兵馬に禮を云ふことを忘れて犬の悪口ばかりを云ひます

『一體、この村の奴等が悪い、彼んな性質の悪い狂犬を放し飼にして置くのが宜しく無え、叩き殺してしまやがりやいゝんだ』

今度は村の人へ餘沫。

この男は頻りに狂犬呼ばゝりをするけれど、兵馬は決してあの犬を狂犬とは思つて居りません。

『さて、お前さんは此れから何處へ行かれるな』

『つい其處の龍王村といふ處まで參りますんで』

『歸りに、また犬が出たら何となさる』

『脅かしちや可けません、もう懲々でございます』

『併し歸りには必ず出て來る』

『戯談じやありません、今度出やがつたら村の若い衆を大勢頼んで叩き殺してしまひます』

『そんな事をするど却て宜しくない、察するのにお前は何かあの犬に怨みを受けるやうな事をした覚えがありさうじや』

『驚きましたね、いくら人間が下等に出來上つてゐたからと申しま

してまだ犬に恨みを受けるやうな事をした覚えはございません』

『犬といふものは三日養はるれば生涯其の恩を忘れぬ代り、一たび受けた恨みも亦死ぬまで覚えてゐるといふ事だ、ごうかするとお前はあの犬に對して意地の悪い事をした其の祟りを受けて見込まれたものと、ごうも左様しか思はれぬ』

『そんな事は決してございませんよ第一あんな大きな黒犬を見るのは今日が初めてなんでございますから、初めて見たものに恨みを受ける筈が無いじやございませんか、狂犬の人食ひに違ひございませぬよ』

『兎に角、わしも彼方へ行く者、龍王村まで一緒に行きませう』

兵馬は金助を連れて龍王村へ入ります。この時分から時雨の空模様
が怪しくなつて來ました。

『降らなけりや宜うございませぬ』

宇都木兵馬は一緒に龍王村の方へ入る途すがら話して行くと、此の
金公といふ折助が如何にも下らない人間である事を知りました。下
手に優しく話して行くと、直ぐに附上がつてしまふ。さうして今の
先、木の上で助けて呉れ〜と叫んだ事などは打忘れて、自分の得
意氣な事をペラペラと喋べる。兵馬は成程下らない人間だと思つて
いゝ加減に話してゐると、自分が川柳をやる事だの雜俳の自慢だの
を、新らしさうな言葉で齒の浮くやうに吹聴する、兵馬は愈下ら
ない折助だと思つたが、ただ下らないばかりではなく兵馬の話し
りを見ては折々引掛けるやうな事をする。これでは犬に逐はれるの
も無理はないと、胸に不快な思ひをしながら、兎も角も龍王村へ入

つて來ました。

龍王村へ入つて村を横切ると釜無川の河原へ出ます。信玄の時代に築かれたといふ長さ千間の一の堤防。その上には大きな並木が鬱蒼と茂つてゐます、右手には高く龍王の赤岩が聳えてゐます、金公が先に立つて其の堤防の並木の中へ分けて行く時分に、さき程から怪しかつた時雨の空がザーツと雨を落して來ました。

金助は、兵馬の先に走つて、同じ堤防の並木の中の、とある神社の庭へ走り込んで、

「今日は、今日は」

戸を叩いたのは三社明神の堂守の家

「金公かい」

燈籠障子から面を出したのは腰衣を着けた人相の良くない大入道。

「木菟入のたか」

こゝは神社である筈なのに、この堂守は怪しげな僧體をしてゐるから兵馬は變に思つてゐると、金公が、

「さあ、どうかお入りなすつてお呉んなさいまし。これはわつし共が大の仲よしで木菟入と申します、見た處は氣味の悪い入道でございませうが、附き合つて見ると氣の置けないお人良の坊主でございませう」

金公は金公で此の坊主を捉まへて木菟入々々々と云ひ、坊主は坊主で金公を捉まへて金公々々と呼び捨てにしてゐる處を見れば中々懸意な間柄らしいが、兵馬は此處で雨宿りをするつもりで中へ入つて見ると、爐の中には釜無川で取れる河魚が盛んに焼かれてゐるし、貧乏徳利が幾つも轉がつてゐます。

雨は中々やみさうもないから、兵馬もつい勸められるまゝに草鞋を取つて上へあがりました。

さうしてゐるうちに坊主と金公が碁を打ちはじめました。見てゐると金公も可成に打てる、坊主は中々強い、金公に三目置かして打つてゐるがまだ坊主の方がズツと強い、金助は連りにキザな面をして例の齒の浮くやうな文句と一緒に石を並べて、時々キウ〜云はせられてゐると、坊主は其の度毎に高笑ひをして金公を頭ごなしに馬鹿にする。

『どうだ金公、こいつが負けたら四つ置くか、それとも一升買うかキウ〜云つた處で碁になつて居らんわ、投げた方が宜からうぜ』實際、金公は弱らせられてゐるらしくキウ〜云つて碁面を見詰めてゐたが、やがて窮餘の一石をバチリと置く。

『おや〜、自暴とおゐでなすつたね、自暴と氣狂ひほど怖いものは無いと權現様が仰有つた、自暴も亦悔るべからず斯うして繼いで置けば問題はござるまい』

『成程、うーん』

金公が唸り出してやがて降参してしまふと大入道大得意カラ〜と打ち笑ふ、兵馬は其れに興を催して、

『御出家一石お願致しませうか。』

『おや〜、お前様も碁をお打ちなさるか、それは〜お若いに頼もしい事じや、金公では下拙聊か喰ひ足りずと思つてゐた處、さあ遠慮なく入らつしやい』

『然らば此の人と同じこと、三目でお相手を致して見やう』

『宜しい、三目さあ入らつしやい』

『バチリ』

『バチリ』

『これは感心、定石を心得ておゐでなさる處が感心、兎角、初心のうちには左様打つてお出でになるが宜しい、其許は中々立が宜うござるな、見込のあるお手筋じや、さうして定石から素直に打ち上げて行かぬと悪い癖が出て物にならぬ、物の譬が此處にござる金公などを御覽じろ、器用一邊で、あつちへ遣り繰り、此方へ遣り繰り、キウ／＼ヒド苦面をしながら打つてゐる、それで年中ビ／＼苦しみ通しで、お終ひの果が投と來るから目も當られない、其處へ行くと下拙の如く定石から打ち込んだものには、悠揚として迫らぬ處がある、よし勝負には負けても碁には勝つと云ふものじや、こゝに御座る金公の如きは勝負には無論負け、碁に於ては元より問題にならず』

引合に出された金公が苦い面をする

『バチリ』

『バチリ』

『え、これは旨い手を打つたな、これはやられたわい、中々油断のならぬ手筋じや、金公を相手にする了見ではチト六づかしい、金公の如きを相手にしてゐる故、下拙もつい見落しが出來て困るて、仕方が無い、そこは其れで若い者に花、併し此れは如何も金公とは違ふ』

一口上げに金公々々と、善い方へは引き合ひに出さないから、金助はいよいよ不平な面をします。

『いや中々やる／＼、お前様は好い師匠に就いて稽古をなされたな殊に上手のものとのみ手合せをしておゐて見えて、下手より上手』

へ強いお手筋じゃ、いや頼もしうござる、ハテ此の一手、これが評らぬ、いやこれは如何も」

木菟入は頭の上へ手を置いてしまつたが、大分こたへたと見えて、金公の棚下しも出なくなつて唸り出すと今度は金公が首を突き出して、

「入道、少し困つたな」

「うーん」

「成程、定石から打ち込んだものには違つた處があるな」

「うーん」

「入道、投げた方がお爲になりさうだせ、碁になつて居らん、投げて一升買うか、さうでなければ白をお渡し申して出直すんだ」

「うーん」

やつこの事で入道が一石、千貫の石を置くやうな手附。

兵馬は番町の伯父の家にある時、伯父から手ほどきの定石を習ひ初め、餘技とは云ひながら相當に心得たものでありました。この坊主中々弱くはないけれど、自分に對して白を持つほどの腕ではないと見て取つたのに、三目置いてゐるから、兵馬に取つては樂なもの、入道は、中は頃から散々に苦しんで、とう／＼降参してしまつて苦い面をすると、金公が大よろこびで復讐の意味を兼ねた駄句を作つたりなどして嘲弄します。入道甚だ安からず思つて、また一石戦ひを挑む、こんな閑つぶしをやつてゐたが雨は止まないのに、入道は負ければ負けるほど躍起になつて、兵馬に疊みかけて戦ひを挑む、兵馬も其の相手になつて、とう／＼其の晩は金公と一緒に此の堂守の家へ一泊することになりました。

兵馬は其の晩勤められるまゝに此の堂守の家へ泊り込んでしまひました。

兵馬を一室に寝かして置いて、彼の本苑入と金公とは、酒を飲み出します。金公が薄つぺらな口先で頻りにキザを云つては入道に愚弄されるのが兵馬の寝間へよく聞える、愚弄されても金公は一向お構ひがなくペラペラ喋べる、さきに柿の木の上で助けて呉れ、と泣き聲を出した事などは腰にも出さず鬼の三匹も退治て来たやうな事を云つてゐるから兵馬はイヤな奴だと思ひます。

この二人はペチャクチャと喋べつた揚句に、打ち連れて此の堂へかけて行きました、あとに獨り残された兵馬、大方こいつ等は此處だけでは飲み足りないで近所の居酒屋へでも飲みに行つたものだらうと思ひました、それで兵馬は落着いて眠ることが出来ました。

其の夜中に俄然として兵馬の夢が破れたのは凄じく吠える犬の聲からであります。

兵馬は其の犬の聲で夢を破られると同時に外で、

「痛ッ」

と絶叫する人の聲、ガバと刎起きて雨戸を押し燭臺を取つて外の闇を照して見ると、二人共打倒れてウンウン唸つてゐるのは金助と木苑入であるらしい。その傍に立つてゐる人の影が一つ

「もし、あなたは宇津木様ではございませんか」

「エ、」

外から呼ばれた我が名、それは女の姿であり女の聲である事だけは確かです。

「もし、わたしは君でございます、伊勢の大湊を出る時に船でお世

話になりました、あの君と申す女でございます」

「あゝ、お君ごのか」

「そんなら宇津木様でございましたか、宜い處でお目にかゝりました」

「不思議な處でお目にかゝる、兎も角も此れへお入りなさい」

「御免下さりませ、ムクや、このお方はわたしの御恩になつたお方ですから吠えてはいけません」

「あゝ、その犬は、お前さんの犬であつたか、晝のうちに此の先の原の道で見かけた犬、そこに怪我してゐるのは誰じや おゝ此處の堂守と途中から一緒に來た男、さてこそ何か仔細のありさうな」

「これには長いお話がござりまする、この人達は、わたしに向つて良くない事をしましたから、それでムクが怒つて此んな目に合はせ

たのでございます、お氣の毒でございますけれど、斯うしなければわたしが助からないのでございますから、どうかムクの罪を許して下さい、下さいまし、ムクが悪いのでございせんから」

「何しても此のまゝにて置けぬ」

兵馬とお君とは力を合せて木蕨入と金公とを家の中へ擔ぎ込んでムクに噛まれた傷を介抱してやりました。

十三

兵馬とお君とは思ひがけない對面でありました。お君の語る處に依れば、一蓮寺の火事の時、椎の木の下に昏倒してゐる間に、自分には誰にか助けられて見知らぬ處へ伴れて來られたが、その助けたといふのは此處にある金助で、連れて來られたのは此の堂守の家であり

ます。

堂守は此の明神の御輿倉の中へ自分を隠して置いたといふ事、それは金助の頼みで、今宵は入道と二人酔つばらつて来て自分をまた伴れ出して妾にするとか女郎に賣るとか云つてゐる處へ突然にムクが現れて此の有様となつたといふ事です。

お君は、また兵馬と別れて舟から上つて以來の事を落ちもなく語ると、兵馬は飽かずに聞いてゐてお君の身の上に波瀾の多いこと、其の度毎にムクの手柄の大きな事に感嘆せずには居られませんでした。「あゝ、それで思ひ當つた、この犬がどうも尋常の犬でないと思つたらいつぞや伊勢の古市の町で、槍をよく使ふ小さな人、あまりに不思議の働き故、頼まれぬに槍を合せて見た處、其の傍にあた一匹の黒い、犬その面魂、些とも油断がならなかつた、さては此

の犬であつたか」

二人の話は、それからそれと續きました。その時、不意にけたゝましい警板の音。

警板は此の堂の、すぐ背後、杉の大木に掛けてあつたのをいつの間、に抜け出したか其處へ上つて堂守の入道が力任せに叩いてゐるのです。

「あの音は」

兵馬もお君も驚きました。

二人が其の音に驚くとムクも首を上げて尾を振ります。

さうすると、わーつといふ人聲、早くも其れと覺つた宇津木兵馬は

「お君どの、こりや大事出来、早く逃げにやならぬ」

「何でございませう、あの音は」

「この堂守が抜け出してあれを打つた、それで村の人を集めてゐるのじや」

「わたし達は何も悪いことは致しませぬ」

「元より悪い事はしないけれども、何をいふにも此方は旅の身、向ふは土地馴染のある人、悪い名を着せられても急には明りが立たぬそのうち血氣に逸る土地の人、どのやうな亂暴をすまいものでもない、今のうちに早く逃げなければならぬ」

戸の外では人の聲が噪がしい。

「泥棒が入つたぞ、俺も此の通り傷を負つたが、甲府から来た金助は殺された、お堂の本尊様も明神の御寶藏も荒された、賊はまだ若い、若い前髪の侍と女が一人に犬が一疋、その犬が強いから咬まれないやうに用心さつしやい」

警板の木の上下入道が大に叫ぶ。

兵馬はお君を促がして一目散に逃げ出しました。

大並木をくゞり抜けて、堤を駆下りると釜無河原。

兵馬は遂に堪へ兼ねてお君を脊に負つて河原を走りました。提灯や松明で追ひかけて来る多勢の人

「それ河原へ下りたぞ、向ふの岸へ相圖をしろ」

漸く川の流れへ来て宇津木兵馬、淺瀬を計り兼ねて暫らく思案に暮れてゐたが、そのうちに乗り捨てられた川船の一隻をムク犬が見つけて飛び込むと兵馬はこれ幸ひと同じくその舟へ飛び乗つてお君を下ろすと共に、竹の竿を取つて岸を突きました。

舟は難なく釜無川の闇を下つて行きます。

程経て舟を着けたのは高田村といふ處、そこで陸へ上がりました。

高田村で舟を捨てた時分には、もう夜が明けておりました、かじがきは 鵜澤まではいくとも無い道程、兵馬はお君の爲に道を枉げてかじがきは 鵜澤まで来て宿を取りました。

それから兵馬は、甲府へ沙汰をしてお君を元の輕業の一座へ送り返さうとしてゐるうちに困つた事にはお君が病氣になつてしまひました。

行手に心の急ぐ兵馬も己むことを得ず其れを介抱せねばならなくなりました。

幸にお君の病氣は太した事は無く四日ばかりするうちに、すつかり快つてしまひ、お君はやつと愁眉を開いてゐると、其處へ甲府から便りがありました、其の便りは又も兵馬とお君の二人を當惑させるものでありました。

お君が入つて来た輕業の一座は、あれから散々になつてしまつて、又も旅廻りをしてゐるか江戸へ歸つたかそれさへ消息が無いといふ事でお君は落膽しました。兵馬も困りました。

お君は、仕方がないから、わたしはムクを連れて江戸へ歸つて見やうといひ出しましたけれどそれは随分危険な事と云はなければならぬ結局兵馬は、お君を當分の間此の宿へよく頼んで預けて置いて自分だけが山入りをすることに定め、お君は兵馬に氣の毒で堪まらないけれども其の好意に従つて暫らく鵜澤の町に逗留する事になりました。

今朝、お君を殘して山入りをした兵馬は、ムクを連れて兵馬を送つて行つて別れた最勝寺前、お君には兵馬の面影が胸を搔きしむるほごに迫つて来て、一人ではゐても立つても

居られなくなりました。

大菩薩峠

(女子と小人の巻了)

大菩薩峠

(中巻の巻)

中里介山著

白根入りをした宇津木兵馬は例の奈良田の湯本まで来て其處へ泊つて其の翌日、奈良王の宮の趾と云はれる辻で物凄いやを見ました。兵馬が歩みを留めた處に、人間の生首が二つ竹の臺に載せられてあつたから驚かないわけには行きませんでした。捨札も何も無く竹を組んだ三脚の上へ無雑作に置き捨てられてあるが、百姓や樵夫の首では無くて兎も角も武士の首でありました。「これは何者の首で、如何なる罪があつて斯様な事になつたものでござるな」

通りかゝつた人に尋ねると

「これは悪い奴でございます、甲府の御勤番衆の名を騙つて、此地の望月様といふ舊家へ強請に來たのでございます、望月様は古金銀が澤山あると聞き込んで其れを嚇して捲き上げやうとして來ましたが、悪い事は出來ないので、丁度、この温泉に泊つてゐたお武士に見現されて此んな眼に合つてしまひました、あんまり圖々しいから首は斯うして晒して置けと其のお武士が仰有る、望月様もあんまり酷い目に合はせられましたから口惜しがつて其の武士のお言付通り此處に斯うして見せしめにして置くのでございます、今日で三日目でございます」

「して其の望月といふのは何れの家」

「あの森蔭から大きな冠木門が見えませう、あれが望月様でござい

ます、大へんに大きなお家でございます、若し此の悪者の餘類が押し掛けて來ないものでもない、此の頃は用心が嚴重で若い者を集めて夜晝劍術の稽古をやつたり鐵砲などを備へて置きますから、あなた様にも其の心持でお出でにならないと危なうございますぞ」

こんな事を話して呉れましたから、兵馬は教へられた通り其の望月家の門前へ走せつけました。

兵馬は望月家の門前へ立つて案内を乞ふと成程、廣庭でもつて若い者が大勢劍術の稽古をして喚き叫んでゐました。

胴ばかり着けて薙の上で勝負をながめてゐた若い者の頭分らしいのが出て來ました。

「何の御用でござりまする」

「あの宮の辻と申す處に出てゐる梟首の事に就いてお尋ね致したう

ござるが」

「あ、あの梟首の事に就て、さうでございますか、まあ如何か此れへお掛けなすつて」

若い者の頭分は其の事に就て語ることを得意とするらしく、喜んで兵馬を母屋の椽側へ延くと、村の劍客達は其の周囲へ集まつて來ました。

「今から丁度五日ほど前の事でございました、當家の望月様へ甲府の御勤番と云つて立派な衣裳をしたお武士が二人、槍を立て家來を連れて乗り込んで來ましたから、不意の事で當家でも驚きました、丁度それにお慶たい事のある最中でございましたから、尙更驚きました、けれども疎略には致すことが出来ませんから、町重にお扱ひ申して御用の筋を伺ふと、いよいよ驚いて慄え上がつてしまひまし

た、其の勤番のお侍衆の云ふ事には當家には公儀へ内密に隠し金銀が隠してあるといふことを承はつて其の檢分に來た、さあ隠さず其れを出して了へば内濟ですましてやるが、さも無い時には重罪に行ふといふ申渡しなんでございます、あんまり突然に無法な御檢分でございますから、當家の老主人も若主人も、親類も組合も土地の口利も皆んな呆氣に取られてしまひました、尤も當家には金銀が無いわけではございませぬ、金銀があるには有るのでございませぬ、他に類のない金銀が當家には藏つてあるには違ひございませぬけれども、その藏つてあるのは有るだけの由緒があつて藏つてあるので決して公儀へ内密だとか、隠し立てを致すとか其んな譯なのじやございませぬ、先祖代々金銀を貯へて置いて宜しいわけが有るんでございますから、まあ其れからお聞き下さいまし………御存知

でもございませうが、甲州は金の出る處なんでございます、金の出るのは國が上國だからでございます、其の金の出ますうちにも此の邊では雨畑山、保村山、鳥葛山なんといふのが昔から有名なのでございます、今でも入つてごらんになれば昔掘つた金の坑のあとが蛙の腸を擴げたやうに山の中へ幾筋も喰ひ込んでおまして、私共なんぞも雨降揚句なんぞに其處へ行つて見ると奥の方から押し流された砂金を見つけ出して捨つて來ることが度々ありまして何しろ金の事でございますから、其れを取つて貯めて置くこと一代のうちには畑の二枚や三枚は買へるのでございます、けれども其れでは濟まないと思つて、拾つた金は皆んな當家へ持つて來てお預けして置くのでございます、さうしますと當家では年に幾度とお役人の檢分がありまする度に其金を献上し奉ると、お上から幾らかづゝのお金が

るといふ仕組になつてゐるのでございますよ、まあの話の順でございますからお聞き下さいまし、文武天皇即位の五年對馬國より金を貢す、よつて年號を大寶と改むといふ事を國史略を讀んだから私共は知つてゐます、何しろ金は天下の寶でございますから私共が私しては濟みませんで、今いふ通り拾つたものまで皆んな當家へ預けてお上へ差上げるやうにして居ります位ですから、當家で其れをクスネて置くなんていふ事が出来るものではございませんで、當家にありまする金銀と申しますのは御先祖から傳はる由緒ある古金銀で、山から出るのとは別なんでございます、その當家の御先祖といふのは……當家の御先祖は權現様よりズツと古いのでございますこのあたりから金を盛んに掘り出しましたのは武田信玄公の時代でございます、尤も其の前に掘り出したものも少しはございませうけ

れど、信玄公の時が一番盛んで甲州金といふのは其の時から名に山
 たものでございます、権現様の世になつてからも随分堀つたもので
 ございますが、其の金を堀る人足は皆んな此の望月様におことわり
 を云はないと土地に入れたもので、信玄公時代からの古い書
 付に金堀の頭を申付候間、何方より金堀罷り越候とも當家へ
 申ことばり堀り申べく、此旨をそむく者あるに於てはクセ事なるべ
 き者也とあるんでございます、その位の舊家でございませうから代々
 積み貯へた金銀が些とやそつと有つた處で不思議はございませう
 古金の大判から甲州丸形の松木の印金、古金の一兩判、山下の一兩
 金、露一兩、古金二分、延金、慶長金、十匁、三朱、大鼓判、竹流
 しなんと云つて甲州金の見本が一通り當家の土蔵には納めてあるの
 でございます、それは何も隠して置くんでも何でも無く、お役人が

後學の爲に見て置きたいとか、學者たちが参考の爲に調べたいとか
 いふ時には、いつでも主人が出して見せてあるのでございます、處
 が今度来たお役人は、大枚三千兩とか五千兩とかの金銀を隠して置
 に相違あるまい、それを出さなければ重罪に行ふと云ふのでござい
 ませう、飛んでもない事でございます、當家の主人が其んな金銀を
 隠して置くやうな人でない事は、私共はじめ村の者が皆んな保證
 を致します、そんな事はございませんと翻譯をしますと、如何で
 ございませう、若主人を引つれてあの宿屋へ行つて拷問にかけてる
 るのでございます、さあ三千兩の金を出せば内済にしてやる、それ
 を出さなければ甲府へ連れて行つて磔刑に行ふと斯う云つて夜通し
 責めてゐるのでございますから、丁度婚禮最中の當家は上を下への
 大騒ぎで、村の大寄合が始まつて其の相談の上年寄達が土産物を持

つて御機嫌伺ひに行つてお願ひ下げにして來るといふことになりま
 したが何の事に直追ひ歸されてしまつて取り附く島がございませ
 私共若い者連は血の氣が多うございますから其んな没分曉の非義
 非道な役人は夜討をかけて殺付けてしまへど、勢揃ひまでして見
 したが年寄達が、まあ／＼と留るものでございますから我慢をして
 ゐました、さうすると可いあんばいに其處に立ち會つて定りを着け
 て呉れたのが一人のお武士でございます。そのお武士は御病身と見
 えまして其の前から此の温泉で湯治をなすつてゐたのでございま
 身體も悪いやうでございましたが眼が潰れておいでになりました」
 「ナニ、口が潰れてゐた」
 前口上は、どうでも宜しいが、これだけは聞き洩らすまじき事
 此の男の口から語られた机龍之助の舉動は斯うでありました。

擬ひ者の神尾主膳であつた折助の權六を一槍の下に床柱へ縫ひつけ
 た時、主膳の同僚木村は怒り心頭より發して、刀を抜き放つて龍之
 助に斬つてかゝつたが、脆くも其の刀を奪ひ取られて、あつと云ふ
 間に首を打ち落されてしまつたから、一座は慄え上つてしまひまし
 た。
 役人に附いて來た下人共は、もう手出しをする勇氣もありませんで
 したが、今まで役人共の爲す處を齒咬みをして口惜しがつてゐた望
 月方の者でさへも、これには青くなつてしまひました。
 口を利用して呉る事は有難いけれどもこれでは餘まりである、こんな
 にまでして呉なくとも宜かつたものを、後難が怖ろしいと誰も役人
 の殺された事を痛快に思ふものは無くて、却て龍之助の舉動の慘酷
 なのに恨みを抱く位でした。

「飛んでもない事が出来た、假にもお役人を斯んな事にして、さうこれからの後難の程が怖ろしい」

蒼くなつて口を利く者もなく手を出す者もなかつたのを龍之助が察して、

「心配することは無い、これは本物の甲府勤番の神尾主膳ではない偽り者である、その證據には自分が本者の神尾主膳への紹介状を持つてゐるし、自分の友達はその神尾をよく知つてゐる、これは近頃流行の浮浪の武士が、こんな狂言をして乗り込んで金を盗らうとこて来た者だ、それだから二人共殺してしまつた、以後の見せしめに此の首を梟し者にしてやるが宜い、後難は更に憂うる處はない、此の二人が乗つて来た乗物の中へ自分が乗つて甲府へ行つて此の責は引き受ける、村の人達にはかゝり合ひはさせぬ」

と云つて龍之助は二人の偽役人が乗つて来た乗物にお伴の連中を其のままにして乗り込んでしまひました。お伴の連中が狐を馬に乗せたやうな面をして龍之助を荷つて此處を立つて行つたのは昨日の朝若い者の頭分は其れを色々な仕方話で竹刀で型をして見せたり何かして大ぶ芝居がゝりで話しました、殊に龍之助が槍で突いた時の呼吸や、一刀の下に首を打放した時の仕草などを見て来たやうにやつて見せて、

「何しろ強い人でございます、滅法界もなく強い人でございます、あれから當家へお出でなすつた時に、斯うして私共が劍術をしてゐるのを見て……ではない其の容子を聞いてゐまして、さあ斯うして拙者が立つてゐるから打ち込んでごらんと竹刀を片手に其處へ突立つておゐでなさる處を大勢して覗つて打ち込んで見ましたけれど」

も、如何しても身體へ觸ることが出来ませでした、眼が見えないであの位ですから眼が見えたらドノ位強いんだかわかりません」

「これは委細のお話、有難う存じました、その旨目の武士といふは永年拙者が尋ねてゐる人」

兵馬は一禮して此の家の門を出て行きました。

望月の家を走せ出した兵馬が此の村を後にして元來た道、其處へ丁度通りかゝつたのは空馬を引いて脊に男の子を負うた女

「其馬は此れから何方へ行きます」

「これから三里村を通つて七面山の方へ參るのでござんす」

「はて、それでは少し方角が違ふけれど、拙者はちと急ぎの用があつて甲府まで歸らねばならぬ者、お見受け申すに、馬は空荷のやうじやがせめてあの丸山峠を越すまで其の馬をお貸し下さらぬか」

兵馬は其女の人に頼んで見ました。

「お急ぎの御用とあらば……わたくし共には少し廻りでござんすけれどお貸し申しても宜しうございます、お乗りなさいませ」

兵馬は此の婦人が快く承知をして呉れたのを嬉しく思ひました。併し、馬に乗りながら見ると此の婦人が、眼に涙を持つてゐるのが不思議であります。

二

斯うして宇都木兵馬はまたも甲府まで戻つて来て見ました處が、机龍之助の乗物が神尾主膳の邸内へ入り込んだ事は確かに突き止めたけれども其れから先何處へ行つたか、それとも此の邸内に留まつて

ゐるものだが、其處の見當が一向つきませんから是非なく非常手段に出で、夜分ひそかに神尾の邸内へ忍び込んで見やうと思ひました。

三日目の晩は雨が降つて風も少し吹いてゐたから兵馬は其れを幸に城内の神尾が屋敷あたりまで密に入り込んで夜の更くるのを待ち追手濠の櫓下へ来て濠端の木陰に身を寄せてゐる時分に、思ひがけなく、濠の中からムツクと怪しい者が現れて来ました。片手には金箱のやうなものを抱え覆面して脇差を一本差し、怪しいと兵馬が思ふ間に、其の男は金箱を濠の端に置いて櫓の方へ、また取つて返しました。

間もなく櫓の下から、また一人の男、今度は金箱のやうなものを脊中に確と結びつけてムツクリと出て来ました。それと同時に前に取つ

て返した男、それも亦ムツクリと出て来て、濠の中へ引張つた細引の繩を手繰り寄せその一端を前に置き放した金箱に結びつけて脊中へ引脊負つて二人は煙の如く消えてしまひました。

其處には二重の怪しみがある、これは必定曲者と思ふた怪しみと。もう一つは、その曲者二人共見覚えのあるやうな形、先に出て来たのが脊といひ恰好といひ七兵衛そつくり、あとから来たのは片腕が無いやうであつた、して見れば徳間の山の中から拾つて来たあのが、んりきといふ男であらうか。

兵馬に實に不審に堪へませんでした。大外れた甲府城内の御金藏破り今眼のあたり見れば、それはドチラも自分の知つた人、のみならず自分が世話になつた人、つい幾日前まで同じ宿にゐた人。

餘りの不審に兵馬は後を追ひかけて見ました。併しもう何處へ行つ

たか姿が見られませんでした。

これを二人の方にしてからが解せぬ事であります。百藏も江戸へ出て小商ひでもして堅氣になるといひ、七兵衛も亦それを賛成したのに、まだ此の邊に滯つてゐて遂にこんな大外れた事をやり出すやうになつたのか、さりとて測り方ない成行と云はぬばならぬ。

兵馬は其の事から、七兵衛なる者に對する疑點が深くなりました。若しも彼は表面あんな事にしてゐて内實は此んな悪事を働いてゐる人間ではなかつたか知ら、さうだと知れば少くとも其の世話になつた事のある自分に取つては一大事だ。人は見かけに寄らぬもの特みがたない者であるわいと兵馬も茫然として我を忘れてゐました。その時に追手の橋の方で提灯の光り數多。

「槽下の御金藏破り、出合へ〜」

兵馬は氣がつけば、危ない事、自分も疑はれるには充分な立場にある。さて何方へ避けたものと思つて見廻したが、何方にも提灯は迷惑な事が出来たわいと思ひました。

兵馬は是非なく覆面を外して追手通りの方へ引返しました。無論の事、其處には警固の侍足輕が澤山ある、その網に引かゝるは覺悟の上で引かゝつた時は尋常に云ひ譯をしやうと心を定めてやつて来たが、果して

「待て！」

バラ〜と兵馬を取り捲いて来た警固の者。

「神妙に致せ」

そこで兵馬は調べられてしまひました。

「今時分、何しに此處へ來られた」

「ちと用事あつて」

「何用があつて」

「神尾主膳殿方まで罷り越たく」

「神尾主膳殿方へ、して貴殿は何者」

「拙者は江戸麴町番町旗本片柳伴次郎家中、宇津木兵馬と申す者」

「神尾殿とは御熟魂の間柄か」

「まだ面會は致しませぬ」

「面識も無いものが此の真夜中に人を訪ねるとは心得難し」

「大切の用向あるにより」

「大切の用向とは」

「それは御城内勤番衆二三の方にも知合があるにより事情を述べ

ば委細明白の事」

「その言譯は暗い、他國の者、夜中此のあたりを徘徊致すは不審の至り、尋常に繩にかゝらしやい」

「繩に」

「温和しくお繩を頂戴致せ」

「繩にかゝるやうな覚えはない」

「手向ひさつしやるか」

「なか／＼、繩を戴くべき覚えなきにより手向ひ致す心もござらぬ」

「言ひ逃れを致さんとするか、不敵者」

「これは理不盡な」

兵馬の言譯は聞き入れられませんでした。それで兵馬に繩をかけやうと群がつて來た時に、其の中から分別あり氣な武士が一人出で來ました。

「お見受け申す處、お年若のやうでもあるし、兩刀の身分、且は番町片柳殿の中と申されるからには拙者にも多少の思ひ當りがござる人違ひして滅多な事があつては宜しくあるまい併し乍ら今宵の大變に出會なされたが貴殿に取つての不仕合せ故、兎も角も尋常に奉行までお同行下さるやう、委細の申開きは奉行に逢つてなさるが宜しからうと存ずる」

斯う穩かに云はれて、兵馬は大勢に圍まれて勘定奉行の役宅の方へ引かれて行つてしまいました。

兵馬は勘定奉行の役宅へ預けられて殆ど牢屋同様の處で其の夜を明かしました、夜は明けたけれども、兵馬の身の明かりは立たなくなりました。

盜賊の行方は一向わからない上に、彼等が忍び出でた痕跡のある處

端は丁度兵馬が通りかゝつたと同じ方向でした。其上に兵馬は神尾主膳を尋ねると云つたけれども神尾は兵馬なるものを一向知らないといふし、それは兎に角、兵馬が何故に夜分あんな處へ來合せたかといふ事が、誰に取つても解けぬ不審でありました。すべてが兵馬に不利になつて行くから、氣の毒にも兵馬は獄に下されるより外に仕方のない破目に陥りました。

三

さる程に道庵先生がまた飛び出して來ました。何處へ飛び出したかと云へば貧窮組の中へ飛び出して來ました。この貧窮組といふものが前に申すやうに山崎町の太郎稻荷から初ま

るには初まつたが、此の位不得要領な組合もなかつたものです。幾百人の男女が市中を押し廻つて町の角や辻々へ大釜を据えて、町内の物持から米やお菜を貰つて來て粥を炊いて食ひ、食つてしまふと関の聲を擧げて、また次の町内へ繰込んで貰つて炊いて食ひ歩くのです、その仲間に入らないと受が悪いから相當の家の者共が皆んな一ばしの貧窮人らしい面をして粥を食ひ歩く、食つて歩くだけで別に亂暴をするではない、大鹽平八郎が出て來るでもなければトロツキーが指圖をするわけではない、たゞわーつと騒いで歩くだけの事だから、道庵先生が出現するには恰好の舞臺です。長者町の先生の家へ町内の遊び人がやつて來て、

「今日は、わつし共の町内でも、いよ／＼貧窮組をこしらへますから、此方様でもお仲間入をして下さるか、さうでなければ、いくら

か奉納を致して貰ひてえんでございます、それが出來なければ此方にも覺悟があるんでございます」と出ました。

それを聞いたから道庵先生が喜び上つて喜びました。

「占めた」

草履を逆さにして遊び人を其方退けにして驅出してしまつたわけです。

「馬鹿にしてやがら、貧窮組なら此方が先達だ、おれに斷り無しに拵へたのが不足な位なもんだ、押も押されもしねえ十八文だ、十八文の道庵は俺だ」

丁度米友が柳原川岸へ行つてしまつた時分に道庵先生は昌平橋で大勢の貧窮組がお粥を食つてゐる處へ驅つけました

「さあ道庵が来たぞ、十八文の道庵は俺だ、見殺した處、貧窮組の先達で俺の右へ出る奴は有るめえ」

自分から名乗りを上げてしまひました。元より道庵先生は此の近所
で人氣があるのです、人氣がある上に丁度斯ういふ舞臺へ乗り出す
には打つて附けの役者でしたから、一同が其の名乗りを聞くと、や
んやと云つて喝采しました。道庵先生の得意想うべしで、嬉し紛れ
に米俵を引いて来た大八車の上へ突立つて演説をはじめてしまひま
した。

「さあ、皆の衆、俺は御存知の通り長者町の十八文だ、今度皆の衆
が貧窮組をこしらへたと云うのは近頃宜い心がけて俺も感心した、
俺に沙汰無しで拵へた事が些とばかり不足といへば不足だが、それ
は感心と差引いて埋め合せて置く、一體物持といふ奴が癪にさわる

歩が成金になつたやうな面をしやがつて、我々共が食ふに困る時に
高い金を出して羅紗なんぞを買ひ込みやがる、そこで皆の衆が物持
から米や澤庵を持つて来てウンと喰ひ倒してやるといふのは天道様
の思召だ、實にいゝ心がけである、賛成！」
煽つてしまつたから堪まらない。

「やんや」

「やんや」

四方から喝采が起る、道庵先生、いかめしい咳拂ひをして、

「此れから俺が先達になつてやるから安心しろ、併し俺は大鹽平八
郎では無えから、危なくなれば逃げるよ、俺に逃られたく無えと思
つたら亂暴をするな、人の物を取るな、女をいぢめるな、役人が來
たら俺も逃るから皆んなも逃ろ」

「やんや」

「やんや」

「相對で物を貰つて喰う分には差支へ無えが人の物を盗つたり亂暴をしたりすると捉まつて首を斬られる、首を斬られるのは俺もいやだがお前達も忌やだらう、だから亂暴をしては可けねえ」

この不得要領な貧窮組は其の夜は昌平橋際へ夜營をしてしまひました。この位の騒ぎだから役人の方へも聞えない筈はありません。けれども幕末の悲しさ、これを取押へん爲に捕方が向つて來る模様も見えませんでした。さうなつて見ると貧窮組の組織は決して此の、一ヶ所に止まらない事です。

江戸市中至る所に此の貧窮組が出來てしまひました。道庵先生の如きは興味を以て此の貧窮組に賛成をしたけれど、貧窮組に馳せ參ず

るものゝ總てが道庵先生の如き無邪氣な煽動者ばかりではありません、と云つて幸ひな事に、大鹽もトロツキも出て來なかつたからそれを天下國家の問題にまで持ち上げる豪傑は入つて來ないで、小無頼漢のうちの抜目の無いのがこれを利用する事になりました。

困つたのは道庵先生で、本業の醫者を其方退けにして貧窮組の太鼓を叩いて歩いてゐます、因果な事に先生には此んな事が飯よりも好きなのでたゞ嬉しくて堪まらないのです、嬉し紛れに一種の煽動者となつてしまつたけれど、時々穩健な説を唱へて、太した亂暴を働かせまいと苦心してゐるのは感心なものです。

この貧窮組が昌平橋に夜營してゐる時分に、これより程遠からぬ處に住居してゐる金貨の忠作はお絹と夕飯を食ひながら壁を聴いて云ふに

「悪い事が流行り出した、こゝは表通りではないけれど、其の中には何か集めに來るだらう、其の時は手厳しく斷つてやる」
お絹は其れに對して、

「そんな事をして悪まれると可けないから少し位出してやつた方が宜いだらう」

「可けません、癖になるから可けません、あんな性質の悪い組合をお上が取締らないといふのが手緩い」

忠作は子供の癖に、この頃ではもう前髪を落して肩揚げの取れた着物を着て一ぱしの大人ぶつてゐます。

「でも大勢に悪まれてはつまらない」

お絹は氣のない面をしてゐたが忠作は一向撓まずに、

「貧乏な奴は日頃の心がけが悪いんだ、有る時は有るに任せて使つ

てしまひ、無くなるこ有る奴を嫉んで、あんな騒ぎを持ち上げる、

あんなのを増長させた日には眞面目に稼いでゐる者が災難だ、わたしは鏝一文もあんなに出すのは御免だ」

「そんな一刻な事を云つて、大勢の威勢で打ち壊しにでも會つた日には些とやそつどの金では埋合せが附かない」

「たとへ打ち壊しに逢つたからと云つて、あんな筋の違つた奴等に物を出してやる事は出来ません、あんなのが出來た爲に日濟の寄り

の悪い事、一體役人が何を愚圖々々してゐるんだらう、一々括り上げて牢へ打ち込むなり首を斬るなりしてしまへばいゝのだ」

此んな事を云つてゐる時に、表の戸がガラリと開いて、

「へえ、御免下さいまし、町内でもいよく貧窮組をこしらへますからお宅様でも如何か應分の御助力を願ひたいもので」

ドヤ／＼と入つて来たものがあります。

「それやつて来た」

忠作は苦い面をして玄關へ出て見ると、威勢のよい遊び人風をしたのが二三人先へ立つて、あとは雑多の貧窮組。

「へえ、御存知の通り町内でも貧窮組をこしらへましたから、此方様でも、何誰かお出で下さるやうに、若しお手少でございましたら幾分か費用の寄進について戴きたいものでございます」
それを聞いた忠作は、

「折角でございますが、私共は無人でございますから」

「それでは如何か、思召の寄進をお願い申します、この通り町内様で皆んな賛成をして戴いたんでございますから」

帳面を繰ひろげて、鰻屋では米幾俵、薪炭屋では店の品幾駄といふやうに夫れ／＼寄進の金高と品物の數が記されたのを見せると

「宅なんぞは此の通り裏の方へ引込んで居りまして、とても表通りのお歴々と同じやうなお附合は致し兼ねます、どうか其れは御免なすつて下さいまし」

「それでは、誰か貧窮組へ出てお呉んなさるか」

「宅は女と子供ばかりで」

「やい、巫山戯やがるな、貧窮組を何だと思つてるんだ、愚圖々々吐すと此方にも了見があるぞ」

「皆さんの方に了見がお有んなさるなら了見通りになさいまし、では貧窮組なんぞへ入る人間は一人もございませんし、そんな出すお金なんぞは鑑一文もございません」

「何だこ、この若造、やい、皆んな聞いたか、今の此の野郎の言草を聞いたか」

威勢のいゝ兄い片肌を脱いでしまひました。其れに續いた函々が皆眼を三角にする。

「貧窮組なんぞへ入る人間は一人も無えんだとよ、そんな處へ出す錢は鏝一文も無えんだとよ、皆さんの方に了見がお有りなさるなら了見通になさいましたと吐したせ、篋棒奴、了見通になくつて如何するものか、貧窮組を何だと思つてやがるんだ、憚りながら貧窮組は貧乏人だ」

「此家の宅は、これで金貸をしてやがるんだ、貧乏人泣かせの親玉は此家の宅なんだ、今のあのコマしやくれた若造が、あれで鬼見たやうな奴なんだ、主人はお妾上りだといふ事だ、金持を欺して絞り

上げた其金で、高利を貸して今度は貧乏人の生血を絞らうと云ふ奴等なんだ、だから貧窮組が嫌ひならう、誰も貧乏の好きな者は無えけれど時世時節だから仕方が無えや、馬鹿にするない」

「貧乏人が如何したと云うんだい、そりや錢金づくでは敵はねえけれど頭數で来い、憚りながらこの通り目高のお日待のやうに貧乏人がウヨウヨと居るんだ、これが皆んなピーピーしてゐるから其れで貧乏人なんだ、金が有るといつて餘まり大きな面をするない、これだけの頭數は皆んな貧乏人なんだ、逆さに振るつたつて血も出ねえんだ、その貧乏人が組合つたから貧窮組といふんだ、貧乏でキウキウ云つてるから其れで貧窮組よ、馬鹿にするない」

多勢の貧窮組が口々に悪態を吐き出したけれど忠作は意

「何と仰有つても私共は、皆さんが貸せと仰有るから貸して上げる

だけの商賣でございませぬ、何も皆さんに筋の立たない金を差上げる由がございませぬから』
斯う云ひ切つて、玄關の戸をバタリと締めてしまつて中へ引込んだから納まらない。

『それ、打ち壊してしまへ』

遂に貧窮組が此の家の打ち壊しをはじめました。貧窮組の一手は遂に忠作の家をこわし始めました。火を放けると近所が危ないから火は放けないで、門、扉、家財、道具を滅茶々に叩き壊します、忠作は素早く奥の間に駆け込んで、證文や在金の類を詰め込んで用心してゐた葛籠の始末にかゝると、何時の間に入つて来たか覆面の大の男が二人突立つてゐました。
この大の男は、貧窮組とは非常に趣を異にして、其の骨格の逞し

い處に、小倉の袴に朱鞘を横へた風采が、不得要領の貧窮組に見らるべき人體ではありません。忠作が始末をしてゐる葛籠の處へ来て、黙つて忠作の細腕をムツと掴んで捻ぢ倒すと同時に一人の男は其の葛籠を軽々と背負つて立ち上がりませぬ。

『盗賊！』

忠作が武者振附くのを一堪りもなく蹴倒す、蹴られて忠作は悶絶する、大の男二人は悠々として其の葛籠を背負つて裏手から姿を消す。貧窮組は表から盛んに叩きこわしてゐたが、いゝ加減叩きこわしてしまふと関の聲を揚げて引き上げました。

元より宿意あつての貧窮組ではないから二度まで盛り返しては來ず昌平橋へ行つてお粥を食つてゐます。貧窮組は此の位、無邪氣といへば無邪氣なものだけれど、合點の行かないのは朱鞘を横へた小

袴の覆面の大の男。表で無邪氣な貧窮組を騒がして置いて、金目の物を引渡つて裏から消えてしまふといふのは武士に有るまじき行でありませぬ。

この勢で貧窮組は江戸の市中へ蔓延して、遂には貧窮組へ入らなければ人間でないやうになつてしまひました。男ばかりではない、女も入らなければならぬやうになりました。職人は職人同志、藝人は藝人同志で貧窮組を作らなければならぬ義務が出来て萬一貧窮組に加入してゐない事が知れやうものなら人間の仲間を外されて穢多乞食の仲間へ組入れられなければならぬやうになりました。さうして貧窮組は遂に江戸市中を風靡してしまつたけれど其の不得要領な事は何時まで経つても不得要領で、お粥を食つて歩く事、せいぐ忠作の家を叩き壊す位の處であつたが、解せぬのは其の貧窮組が騒いで

で行つたあとで必ず貧窮組らしくない仕業が二つ三つは必ず残されてゐる事です。この手段は前の忠作の家を荒した時と同じやうな手段で、表で貧窮組が騒いでゐる時、裏で、前に見る通り、朱鞘を差した堂々たる武士が仕事をするのであります。

其の強奪の仕方が餘りに大膽で大袈裟で、然も遮る人があつても人命を殺めるやうな事はなく、衣類や小道具などには眼も呉れず、纏まつた金だけを引渡つて悠々として出て行く。

不得要領で何處までも擴がつて行く貧窮組、それと脈絡があつて此の強盜武士に要領を得さするものとすれば、貧窮組も決して不得要領ではないけれど、貧窮組に其んなアクトい根のない事は其の成立の動機が煙見たやうなのでわかるし、其成行がお粥以上に出でないのでわかります。然らば其の貧窮組を表にして、其れとは全く没交

涉でありながら、巧みに其れをダシに使つて大金を奪ひ歩く武士體の強盜は果して何者、さうして其の盜つた金を何事に使用するだらう。市中の大商人で、この朱鞘の武士の強奪に會つたものは無數であつたけれども、後の祟りを怖れて其れを表立つて申出でない、申出で、も當時の幕府の威勢では其れを充分に取締るの力さへ無かつたものです。

四

徳川幕府の影が薄くなつて其のお膝元でさへ此の始末。貧窮組が斯うして不得要領の騒ぎを續け、浪士と覺しき強盜が影へ廻つて悪事を働き、なほ火事場泥棒式の悪漢が出没するけれども、

それを取締る捕方は出て來るといふ評判だけで、些とも出て來ません。

人形町の唐物屋を貧窮組が叩き壊した時は、朝の十時頃から初めて家から土藏まで粉のやうに叩き壊してしまひました。いくら多勢の力だからと云つて此れは人間業とは思はれませんでした。表の店の鐵の棒が飴を捻るやうに捻切つてありました、それを捻切つたのは十五六の子供であつたといふ事、それは天狗の子に相違ないといふこと、天狗の子供が先に立つて大勢の指圖をして歩くのだといふやうなことが言ひ觸らされました。

「天誅」の文字が江戸の市中にも流行り出して來て市民を戦慄させたのは其れから幾らも経たない時でありました。此の「天誅」の文字は大和の「天誅組」から筋を引いたものか如何か判らないが、武

士と武士との間に行はるゝのみでなく町人にまで及びます。私に人の首を斬つて橋の上や辻々へ捨札と共に掛けて置きませす。市民の財産の危険は漸く生命の危険に脅かされて來ました。

さて本所の鐘撞堂の相摸屋といふ夜鷹宿へ、やつと落着いた米友はお君から何かの便りがあるかと思つて、前に兩國の見世物を追出された晩、お君と二人で宿を取つた木賃宿へ行つて容子を聞いて、まだ何も消息が無いと聞いて失望して歸りがけに、兩國橋を渡りかかる時、多くの人が橋の上に立つてゐますから、米友も何氣なく覗いて見ました。米友ではトテも人の上から覗き込むことは出來ないから、人の腰の下から潜るやうにして見ると橋の欄干へ板札が結び付けてあります。米友は學者（お君に云はせれば）ですから直ぐに其の板の文句を讀むことが出來ました。

本所相生町二丁目 箱屋惣兵衛右之者商人の身ながら元來賄金を請ひ、府下の模様を内通致し、剩へ婦人を貪り候段、不届き至極につき、一夜天誅を加へ兩國橋上に梟し候所、何者の仕業に候哉、取片附候段、不届きに且不心得につき、必ず吟味を遂げ同罪に行ふべき者也

報國有志

月 日

此高札三日の内取片附候もの有之ば、役人なりとも探索の上、必ず天誅すべきもの也

米友は其の文句を讀んでしまつたが、臍に落ちない事がありました。「この札は此りや誰が立てたんだ」米友は獨り言のやうに聞いて見ましたけれど誰も返事をするものはありません

「此の高札三日の内、取片付候ものあらば、役人なりとも探索の上、必ず天誅すべきもの也てへのは穩かぞねえ」

米友が仔細らしく此んな事を云ひ出したから集まつてゐた人は其れを聞いて滑稽に思ふよりは怖ろしく感じました。さうして何者が其んな事を言うかと思つて、聲の出た處をよく見ると人の股の間にモグ／＼してゐる米友でしたから皆んなブツと吹き出しました。

米友に取つては笑はれる自分よりも、笑ふ奴等の方が可笑しい。單純な米友は理由なきに冷笑された事を不本意としてムツとして來ました。

「何が可笑いんだい、俺等の言ふ事が何が可笑いんだい」

「若い衆、さう怒るもんじやねえよ」

米友がムキになつたのを和めたのは老人。

「こりや天誅紙といふ奴なんだから、お役人でも始末に行かねへんだ」

「天誅紙といふのは何でございます、お爺さん」

米友は老人の面を見上げる、

「天誅紙といふのは、この頃流行り出した悪い貼紙で、疱瘡神よりモット險呑な流行神だ」

「其んな險呑な流行神を平氣で眺めてゐる奴の氣が知れねえ」
見物はまたドツと笑ひ出して、

「うむ、全く氣が知れねへ、若い衆、お前何とか一つ其の流行神を始末をして見ねへな、人助けになるぜ」

「馬鹿にするない」

米友が眼をクル／＼して群集を見廻した、その面つきと身體を見て

群集はやはり笑はずには居られません。高札よりも此の方が、餘ほど見榮があると思つて

「豪い！」

拍手喝采して此の奇妙な小男の本氣になつて憤慨するのを彌次り立て、樂しまうとすると、米友は却て其れ等を相手にはしないで、欄干に結びつけてあつた高札の繩目を解きにかゝつたから、

「おやく〜」

彌次連の面の色が變ります。

「おい、若い衆、小せえの、何をするんだい」

慌て留めたのは老人。

「冗戯じやねえ、煽てに乗るにも大概がいゝ、その高札へお前、指でも差さうものなら、大變な事になるせ、引込んでゐなせへ〜」

「ナニ構はねえ」

「三日の内、取片付候ものあらば、役人たりとも探索の上必ず天誅すべきもの也、この字がお前にも讀めたんだらう、天誅といふのは首が飛ぶことなんだ、いゝかい、この高札を動かさうものなら、お前の首が無くなるんだ、お前が遠からず首を斬られてしまふんだせ」

「誰が俺等の首を斬に来るんだ」

「天誅だよ〜」

「天誅が首を斬りに來るのか、天誅といふのは何だ、俺等はまた天誅に首を斬られるやうな悪い事をした覚えは無え」

米友は留めて呉れる老人の手を振拂つて苦もなく高札の繩を解いてしまひ其の高札を振上げて橋の上から川の中へボンと投げ込んでし

まひました。

「無茶な事をする奴だ」

さすがの彌次馬も舌を振つてしまひました。

これが不思議な縁で米友は其の翌日から本所の相生町の箱屋惣兵衛一家の留守番になつてしまひました。それで鐘撞堂の相摸屋から氣軽く其處へ移つてしまひました。

この縁は昨日の高札の一件からであります。米友が高札を川へ抛り込んだ爲に、町内からこの家の留守番を押つけられたものでした。米友も亦押つけられた事を却て幸ひにして箱惣の留守番を欣んで引き受けてしまひました。

米友が留守番を押つけられた箱惣の家は大きな家でした。けれども

誰も一人も住んではゐないので、ガラ空です。たゞの空家と違つて誰も留守居をし手のない空家なのです、昨日、米友が投げ込んだ札の文句にも

本所相生町二丁目

箱屋惣兵衛

右之者、商人の身ながら、元來賄金を請ひ、府下の模様を内通致し、剩へ婦人を貪り候段……

とある通り、浪士達に悪まれてツイ此の間の晩、首を斬られて、兩國橋へ梟らし物にかけられた惣兵衛の家です。その首が誰が如何したか直に片附られてしまふと、其の後へ立てられた高札が即ち米友の川へ投げ込んだものであります。その後難の人身御供の意味で留守居を押し附けられ米友は主人の居間であつた贅澤な一間にゴロリ

と横になつてゐる、其の傍には例によつて槍が一本あります。何者が来るか知らないが、仕返しに来たら此の槍で挨拶をしてやるもとの主人には何か恨む處があるか知れないが、自分は疚しい處が無いと。一人で力んでゐたけれど二晩三晩といふものは、サツパリ何も手答がないから、米友も力瘤が弛んで來ました。四晩目の晩、雨が降つて鬱陶しいものだから、行燈の下で、やはり寝ころんで繪草紙を見てゐました。

「今晚は」

「今晚は」

二聲目で初めて氣が着いた米友は外で呼ぶのが女の聲で、表の戸を軽く叩いてゐるやうでしたから

「今晚は」

返事をして次の文句を待つてゐましたが、不思議な事に其れツ切り

「怪しいな、人を呼びつ放しにして引込むなんて」

「今晚は」

「返事をしてゐるじやねえか、何か用があるのかい」

「あの、仕出し屋でございませうが……」

ナンダ、いつも辨當を運んで呉れる仕出し屋か、辨當ならば、もう食べて終つたから入用はないと思つて、

「辨當箱を取りに來たのかい」

「さうでは無いませう、若い衆さんに一口上げて呉れと町内から頼まれました」

「ナニ、俺等に一口上げて呉れつて、そんな人は無へ筈だが」

「どうか此處をお開けなすつて下さいまし」

「どうも怪しいな」

米友は怪しいと思ひながら戸を開けるといつも来る仕出し屋の女が丸に山を書いた番傘を被つて岡持を提げて立つてゐます。

「俺等に御馳走して呉れるといふのは誰だらう」

「町内の衆でございます」

「町内の誰だらう」

「たゞ町内から届けたと、さういへば判ると申しました」

「俺等の方ではよく判らねえ」

米友は一合の酒と鰻の井を受取りました。仕出し屋の女は歸つてしまひます。米友は、また元の處へ歸つて、鰻の井と一合の酒を前に置いて、頻りに其れをながめてゐました。一合の酒も飲んで見たくない事はない、鰻の井も食慾を刺戟しない事もない、けれど

も町内の誰が寄越たんだか、それが判らないのが不足である、うつかり御馳走になつてゝい者だか如何だか、……米友は一合の酒と鰻の井を後生大事に眺めてゐました。

一合の酒と鰻の井を眺めてゐる米友。

「飲んで終はうか、それとも飲まずにゐた方がいゝかこの鰻の井も食つて終へば其れまでだが食はずに置いて見た處で其れまでだ」米友は色々考へて見たが結局、この無名の贈り主から贈られた酒は一滴も飲まず井は一箸も附けずに抛つて置く方が宜しいと覺悟をして床の間の方へ持つて行つて飾つて置きました、飾つて置いてそれをやゝ遠くからまた暫らくながめてゐたが、

「斯うして俺等に酒を飲まして置いて酔つた處を見計らつて計略にかけるつもりだとすると、其んな計略に引かゝつても詰らねへ」

誰も米友を毒殺しやうといふ程の物好も無からうけれど、米友の方でとう／＼一合の酒と鰻の井を敬遠してしまつて、それからまた本を見出してゐると、

「今晚は」

「又も表で人の聲、前と同じやうに女の聲。」

「誰だ」

「仕出し屋でございます」

「ちエツ、また仕出し屋か」

「まことに相済みませんが先程のお井と御酒は間違ひました」

「ナニ間違へたつて」

「御近所へ持つて上るのをつい間違へまして申譯がございません」

「そんな事だらうと思つた、俺等に御馳走して呉れる奴は無駄な

んだから」

米友は跛足を引きながら、今床の間へ飾つて置いた一合の酒と井果して手を附けなかつた事の幸ひを感じて、其れをそつくり持つて来てやりました。仕出し屋の女の方では食はれてしまつても此方の粗忽だから文句の無い處へ米友が手も附けずに返して呉れたのだから大へん喜びました。

「氣をつけなくつちや可けねえ、俺等だから手を附けなかつたが、外の者なら食つてしまふんだ、俺等も實は食つてしまはうか如何しやうかと色々考へたんだ」

「どうも相済みません」

仕出し屋の女は定まりの悪い面をして、一合の酒と鰻の井を持つて急いで敷居を跨いで外へ出ました。米友は一合の酒と鰻の井の

香ばかりで妙な面をして見送つてゐたが、表を二三間も歩いたと思はれる仕出し屋の女中が、

「あれ——」

ガチャン、ピシーンといふ音、それによつて見ると、女中は其邊で轉んで倒れて泥濘の中へ折角の一合の酒も鰻の井も皆んなブチまけてしまつたやうですから、米友は舌打をして、

「だから云はねへ事ちやあ無えや粗忽かしい女だなあ」

潜り戸から面を出して雨の降る暗い處で轉んだ女中を嗜めやうとする途端。

「静かにしろ」

その潜り戸から跳り込んだ二人、小倉の袴に朱鞘に覆面、脊格好共忠作の家で金目の葛籠を奪つて裏口から悠々と逃げた強盜武士其位

の男であります。

「さあ來やがつた」

覺悟の上、米友は不自由の足ながら傘のお化のやうに後へ飛んで返つて以前の一間に置いてあつた槍を手に取りました。

「待つてたんだ、兩國橋の立札を川ん中へ抛り込んだのは俺等の仕業に違えねへ、さあ何とでもして見ろ、宇治山田の米友の槍を一本食はせてやる」

米友の槍はこれを侮つても侮らなくても防ぐことは六づかしいものです。

「呀ッ」

内へ轉げないで外へ轉げた覆面の浪士は米友の一槍で太股のあたりをズブリと刺されたらしい。

折角金貨を初めた忠作あの夜の一騒ぎから滅茶々々になつてしまつて、お絹は何處へ行つたか行き方が知れないし、金目の物は悉く奪はれてしまひました。

「癪にさわる、あの貧窮組といふ奴が癪にさわる、それにあの浪人者、浪人者といふ奴が彼方にも此方にもウロ／＼して事あれかしと覗つてゐやがる、貧窮組といふ奴はワイ／＼騒ぐだけだが、浪人者といふ奴は大ピラで強盗をして歩く様なものだ、斯うして歩いてゐる中には何處かで出會すだらう出逢したら後をつけて手證を押えてから町奉行へ訴へて出るんだ、此方も意地だ、キツト尻尾を捉まへ

て見せる、おれの家から取つて行つたものだけは、取返さなくつて置くものか」

忠作は齒齧みをしたながら、此の頃では毎夜、蕎麥屋の荷物を擔いで蕎麥は賣つたり賣らなかつたりして夜遅くまで市中を歩いて佐久間町の裏長屋へ歸ります。今宵は淺草方面から賣歩いて兩國橋手前まで來ると、

「駕籠屋」

闇の中から人の聲、それに呼ばれて朦朧の辻駕籠が、

「へえ」

と云つて振り返つた、とある家の用水桶の蔭に眞黒な人が二人、兩方共長い刀を差してゐます。

そこで駕籠屋を不意に呼びかけたから、駕籠屋も驚いたやうであつ

たし通りかゝつた忠作も少し驚きました。

「駕籠をこれへ持つて参れ」

「どうもお氣の毒様、これから藏前のお得意まで行くんでございませうから」

「黙れ！黙つて駕籠を持つて来い」

嚇かして置いて長いのをスラリと引抜くのではなく懐中から投げ出したのは若干の酒料らしい。

用水桶の蔭に隠れてゐた浪人體の怪しの者は脊に引掛けてゐた一人を勞はつて駕籠の中へ入れると

「旦那、何處まで行くんでございます」

「黙つて拙者の行く處へ行けば宜い」

駕籠側に一人が附き添うて無暗に走り出しました。

それを見てゐた忠作は、何と思つたか蕎麥屋の荷物を抛り出して一目散に駕籠の跡を追ひかけました。

神田へ出て日本橋を通つて丸の内へ入つて芝へ出て愛宕下の通りをまた真直に何處までもなく飛ばせる。遂に駕籠は芝の山内へ入る丸山の五重の塔、其の五重の塔の姿が丸山の上に浮き立つてゐるのを横目に睨んで土塀だの板塀の物見だの長屋だの幾つも廻つて駕籠が飛んで行く、左右を見廻すと、やつぱり丸山の五重の塔、はて其れではあの塔の廻りをグル／＼廻つてゐるのかな。

さう思つてゐる中に大きな土塀つゞきで右の五重の塔と向き合つた處に堂々たる黒塗の大門がある、その堂々たる大門の中へ駕籠はスツ／＼と入つて行きました。

何者の邸であらうか知らないが、入つて行つた者も武士の姿こそし

てゐるが其の仕業は武士ではない、此の家から出て、さういふ事をさせる筈も無からうし、外からさういふ事をした者を内へ黙つて入れる筈も無からうと忠作が思つてゐると、門番が居るのか居ないのか知らないが無事にスーツと其の駕籠は門内へ納まつてしまひました。

あの駕籠が通れる位なら自分も通れるだらうと忠作も續いて入り込まふとすると、

「コラ誰かッ」

雷のやうな一喝。

「今のおの乗物の……お乗物の」

「乗物が如何した」

「あれは當家の御家中のお侍でございませうか」

「馬鹿！」

頭から一喝した仁王のやうな門番が取つて食ひさうな權幕ですから忠作は怖ろしくなつて飛び出しながら黒塗の堂々たる大門を見上げると正面三ヶ所に轡の紋があります。

この門をよく見直すと左右に門番があつて家根は銅葺の破風造り、鬼瓦の代りに横木のやうなものが置いてあります。

土塀を一周り廻つた忠作が通りの町家で聞いて見ると、これは鹿兒島の島津家の門だと知れました。

鹿兒島の島津家といへば九州第一の大々名、其の門と邸の結構の堂々たることはさもあるべき事だが判らないのは其處から強盗が出て町家を荒して歩くといふことです。あの二人の者は儘に自分の家へ入つた浪人體の強盗、その一人はごうやら手傷を負うたらしい一味